

始



天下
奇勝
赤目瀑香落溪寫真帖

123
138

貴族院議員男爵藤堂高成閣下題字



山水松了

不美

藤堂高成

高成



大阪朝日新聞社長村山龍平氏題字

美田景徳

歡賞

書畫山人 出

大阪毎日新聞社長本山彦一氏題字



山飛水立
關函奇

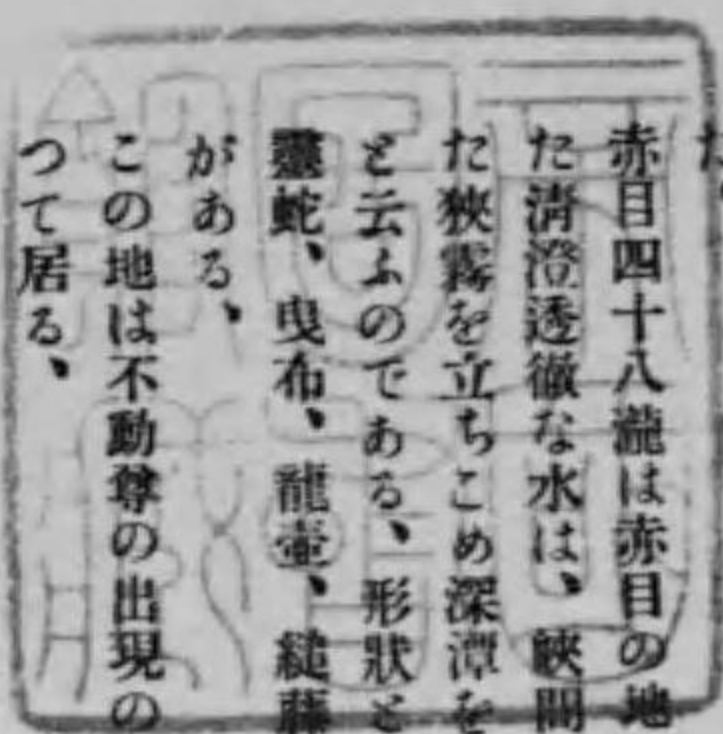
七十雙

松陰



序

赤目の名からしてすぐに怪奇な呼稱でないとは云へない、もし、傳説のおもしろ味に興味を感ずる人があるならば、土地の人は赤目の名の起りをかう云ふ言葉で説明してくれる、不動明王は峽間を流れる碧流を渡つてこの土地に赤い目と黒い目とを持つた二頭の牛に乗こんで出現した、暫らくの間この地に滞つて居た不動尊は、あの時、黒い目の牛に騎つて山間の安居を離れて遠く關東に出開帳に行つたものであると、その黒目の牛と共にどよまつたところが東京の近郊の今の目黒でその不動尊は目黒の不動尊として現に關東人の信仰の的となつてゐるのだと、そして赤目の牛の残つたところが即ち今の赤目であるのだと、出開帳をした分店であるべき目黒の不動尊が諸人の信仰をあつめ、本家であるべき赤目が土地の片寄つてゐるためにうれ程多く知られずゐるのだと、これを人間のに稽へて不動尊の消長、榮枯のあとを見てもおもしろいと思ふ、と同時に赤目黒目の牛の目のことに焦点を置いてゐることも考へやうによつてはおもしろいことだ。



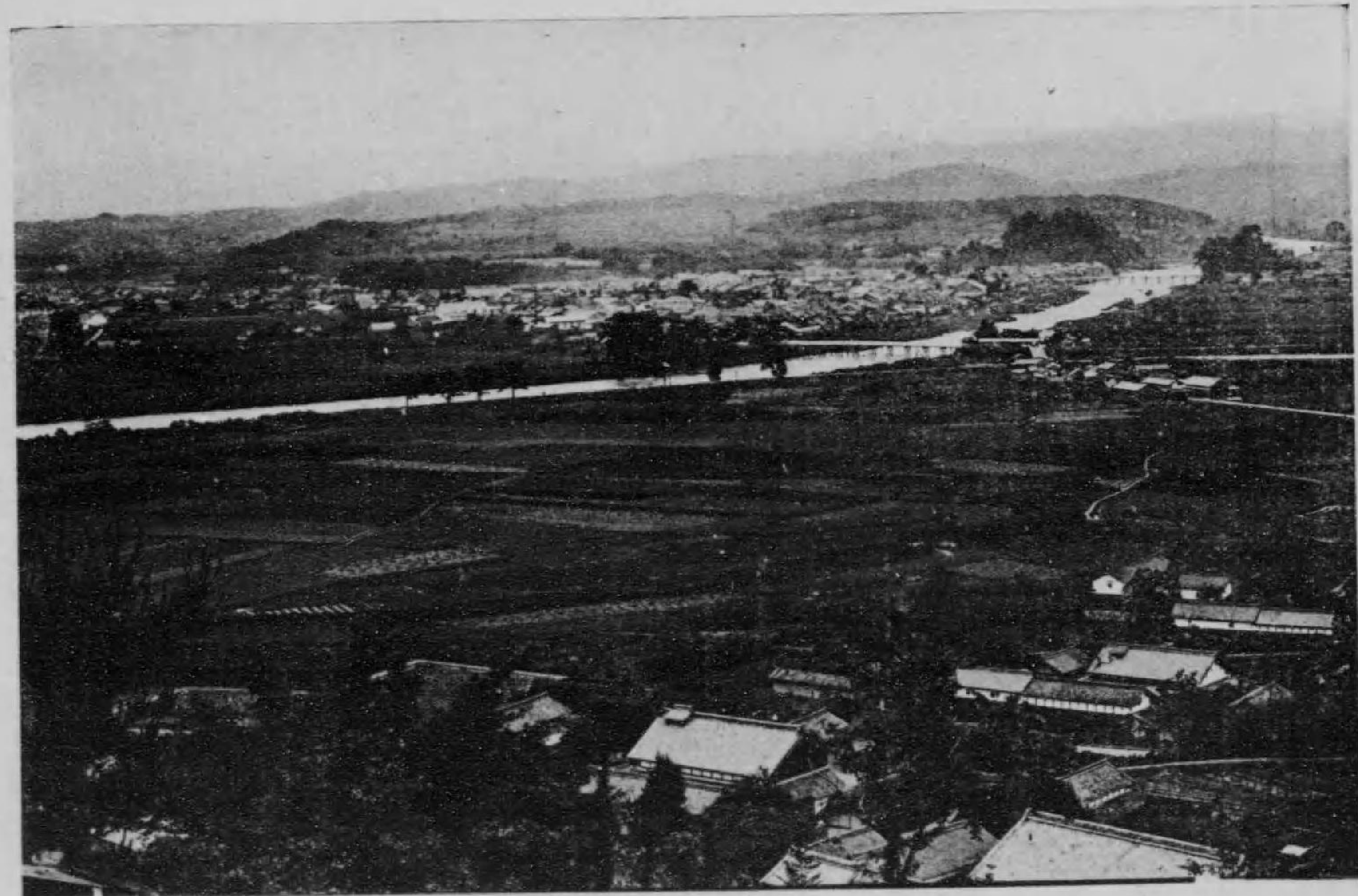
赤目四十八滝は赤目の地にある四十八滝である、重巒の奥から岩を越つて湧きた清澄透徹な水は、峽間を流れ流ること數十町、岩に激して、山神のいふに似た狭霧を立ちこめ深潭をつくり、急下して瀑布をなしてゐる、うれが四十もあつたと云ふのである、形状も、落下の水量と故事に因んで、観音、行者、千手、不動、靈蛇、奥布、龍壺、鏡、柿窪、横潭、荷擔、琵琶、岩窟等の名のつけられ、大正の内に交つて居る、この地は不動尊の出現のいひつたへと共に、役の小角が山を開いたと、いふ話も残つて居る、

瀑の名の観音、行者、千手、不動、靈蛇、龍壺など山の名の経塚を思ふ時、いかにも佛縁の深い所だといふことも肯かれるのである、数十町の流れに沿ふて懸崖を攀ぢのはつて行く時は、まさに登山の氣分を味ふことが出来る、山のぼりの快懐と飛瀑の涼味とを二つながら持つたこの地のやうなところが夏期山と水に親しむことこの旺んな現代の人に迎へられない譯はないのであるが、甚だ遺憾なことは、土地が長い間交通の便からとり残されてゐたことである、然し今は伊賀の上野から名張に至る十四哩を伊賀鐵道が通じ名張から赤目に至る一里餘を自動車走つてゐるので、京阪神、奈良地方から一日の行程として極めて適當な場所となつた、ここに赴く人はその路のついでに荒木又右衛門で有名な鍵屋の辻と大雅堂の古蹟と、敵に對する備への妙を極めた藤堂の居城のあととを伊賀の上野町に見ることを一日の行程の内に加へることも有意義である、感じたまゝを聯ねて序にかへる。

大正十二年八月

大阪毎日新聞編輯局にて
不染 奥村信太郎

423-138



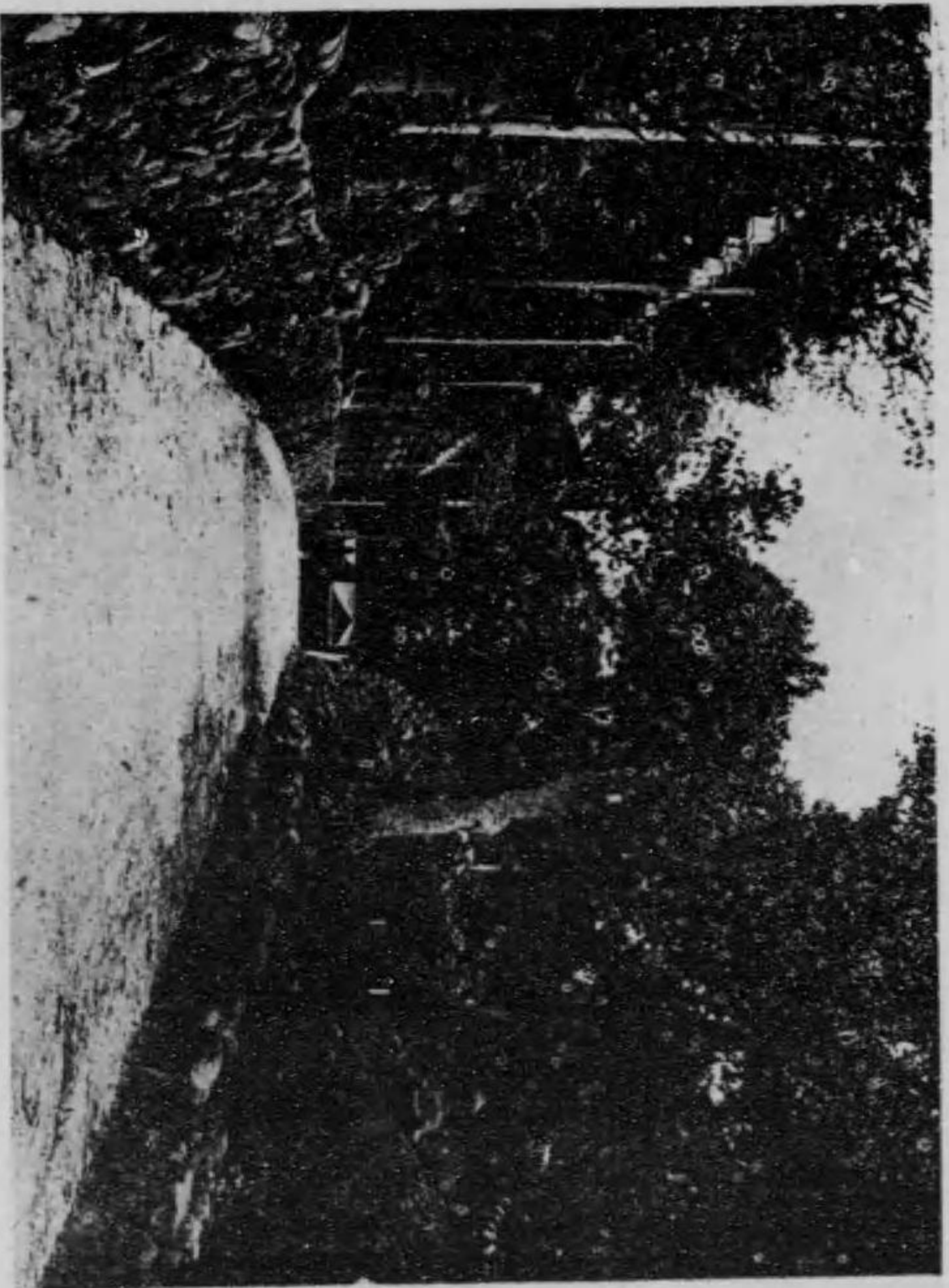
名張町の遠望（金比羅山より望む）

一、名張町の全景

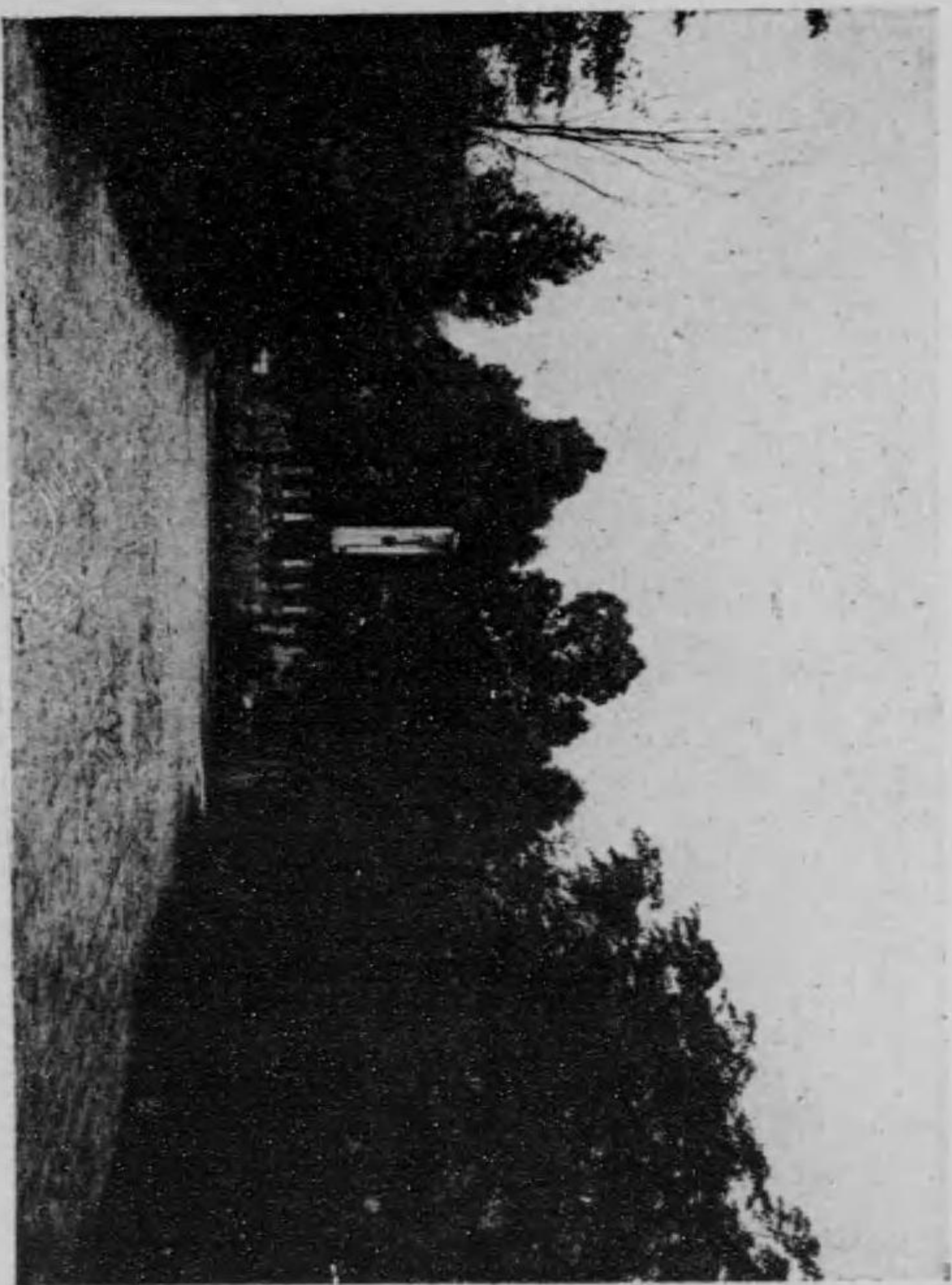
三重縣名賀郡の西南部に位し、夙に伊勢大和に通ずる要路にあたり、舊藤堂藩の支府にして、戸數一千三百餘人口五千有餘あり、實に伊南に於ける商工業の中心たり。

二、宇流富志禰神社
縣社にして、名張町の氏神なり。

三、忠 靈 碑
名賀郡出身の英靈を奉祀す。



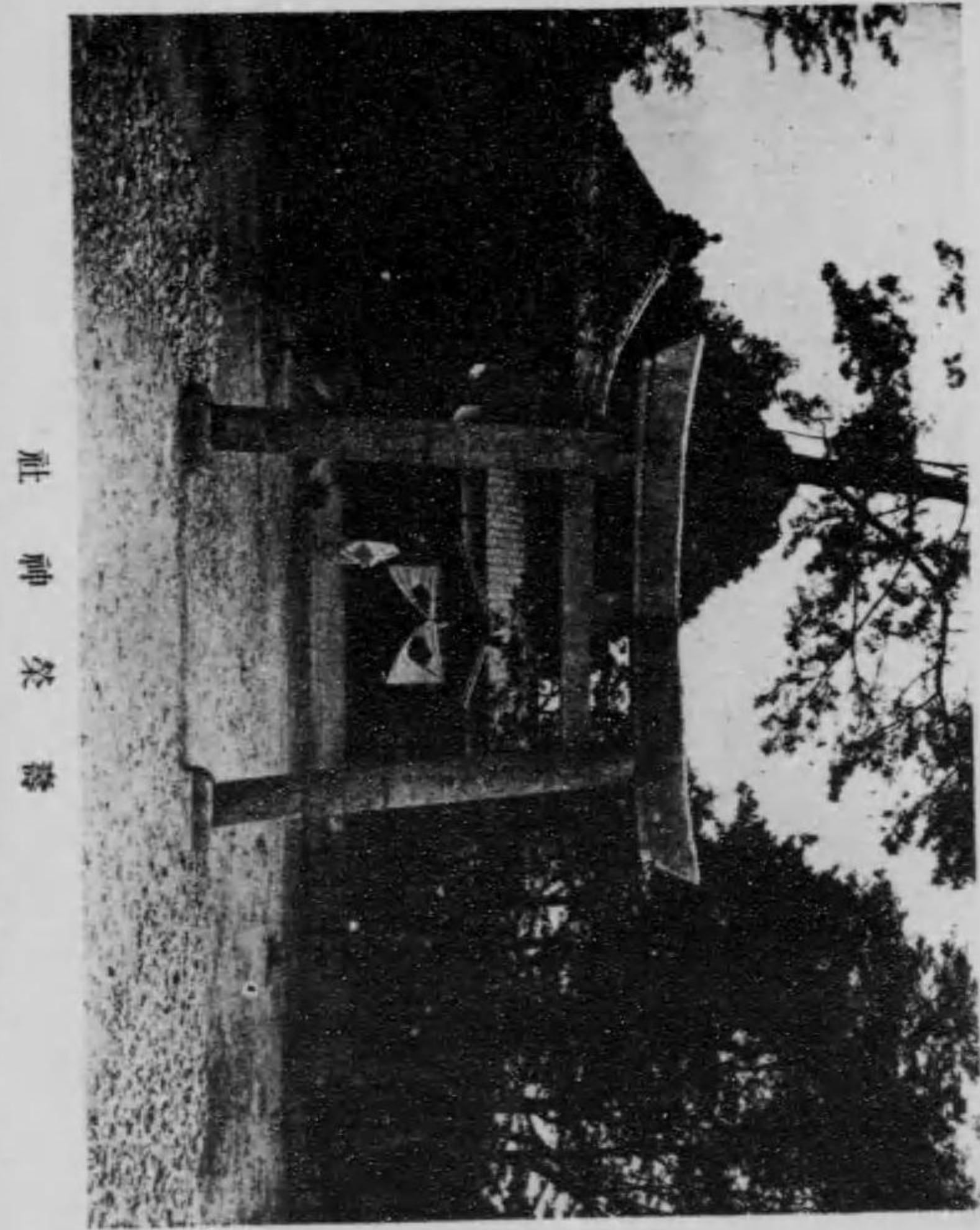
縣 宇流富志 禰神社



忠 靈 碑



金比羅神社



壽榮神社

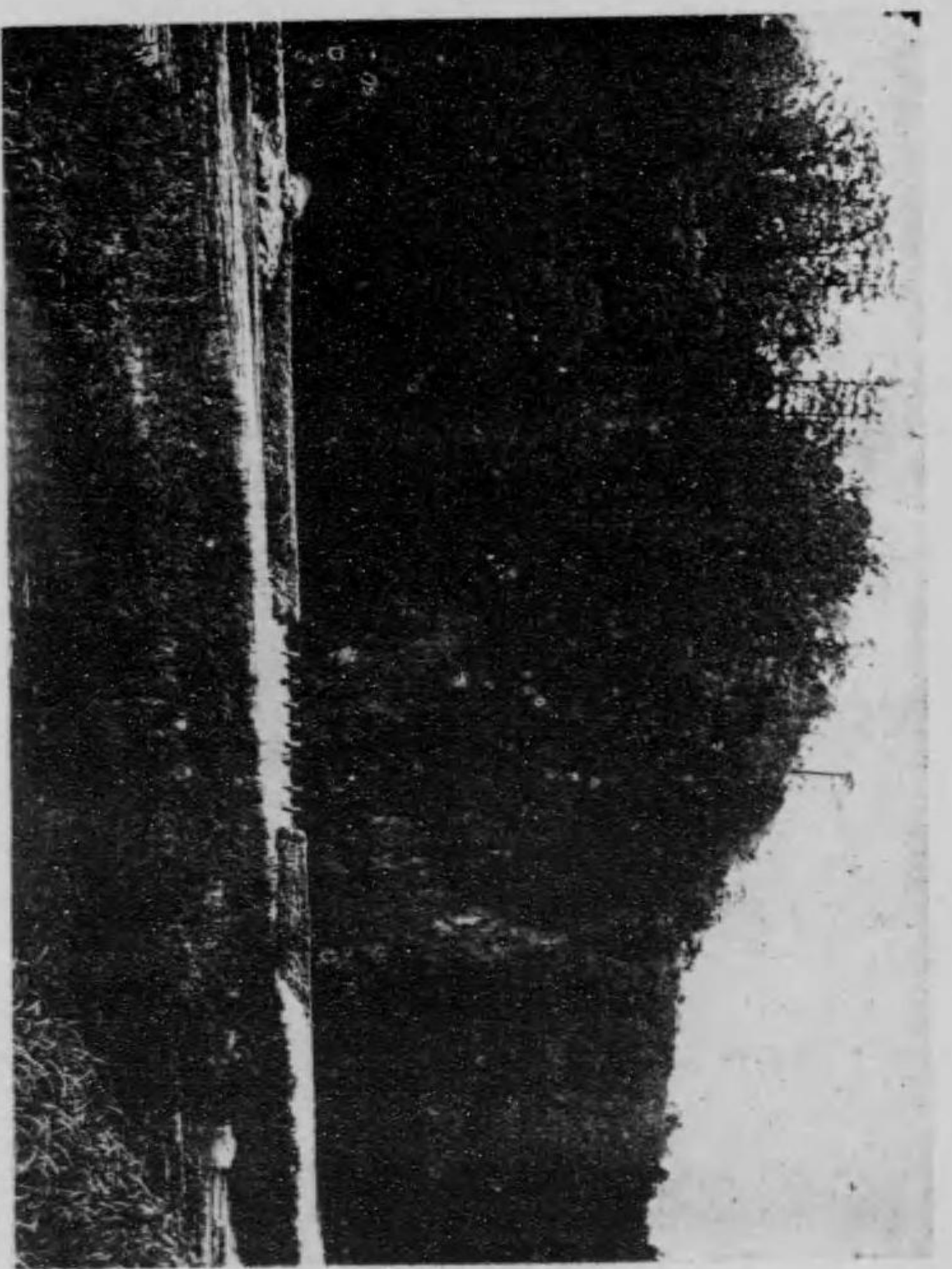
四、壽ひ榮じ神社
名張藩主藤堂高吉公を祀る。

五、金比羅神社
名張町の西方、錦生村大字黒田にありて風景
絶佳なり、四時散策を試むる者多し。

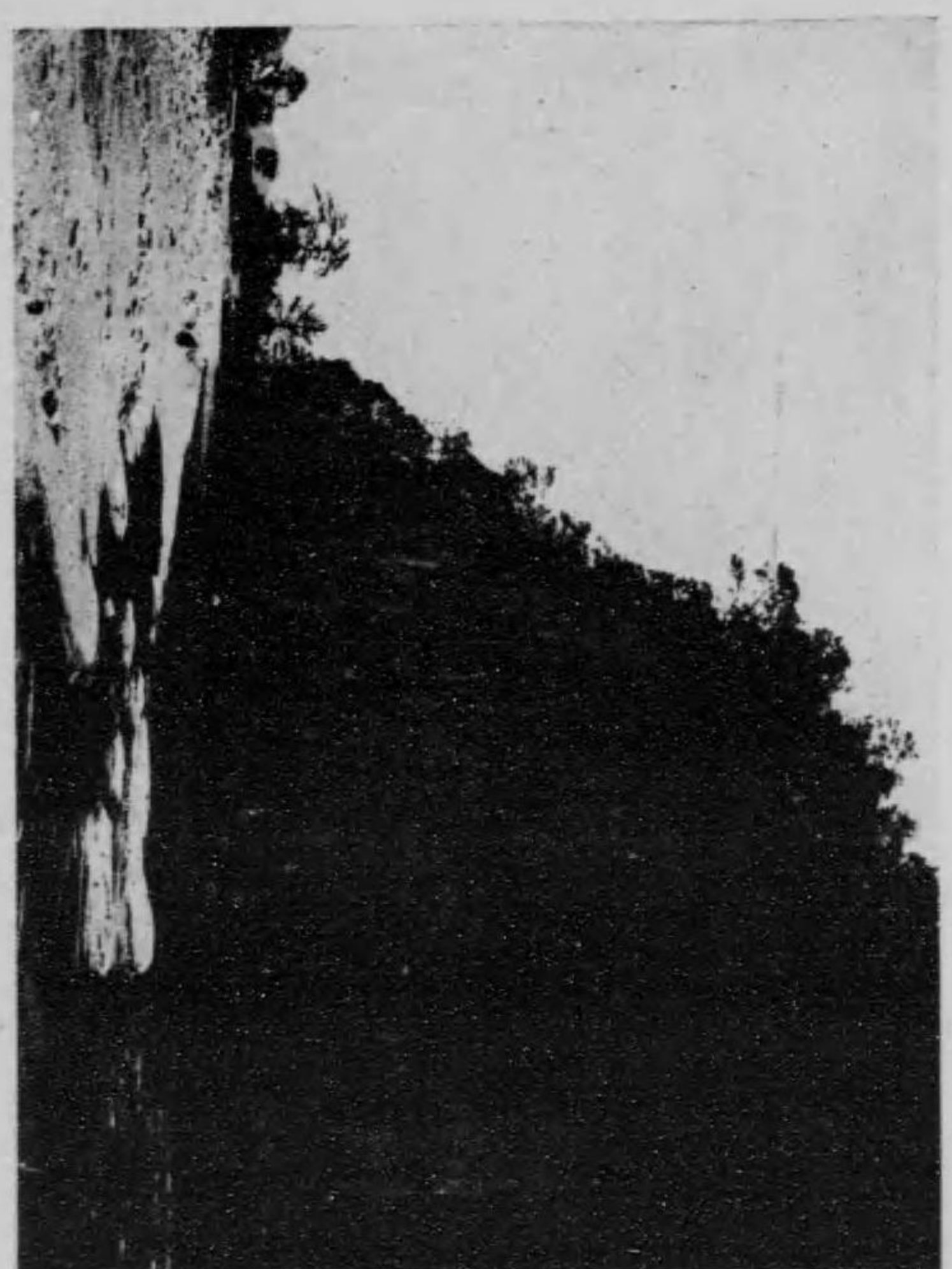
六、熊岩井堰
錦生村大字安部田鹿高小場にあり。

七、熊岩

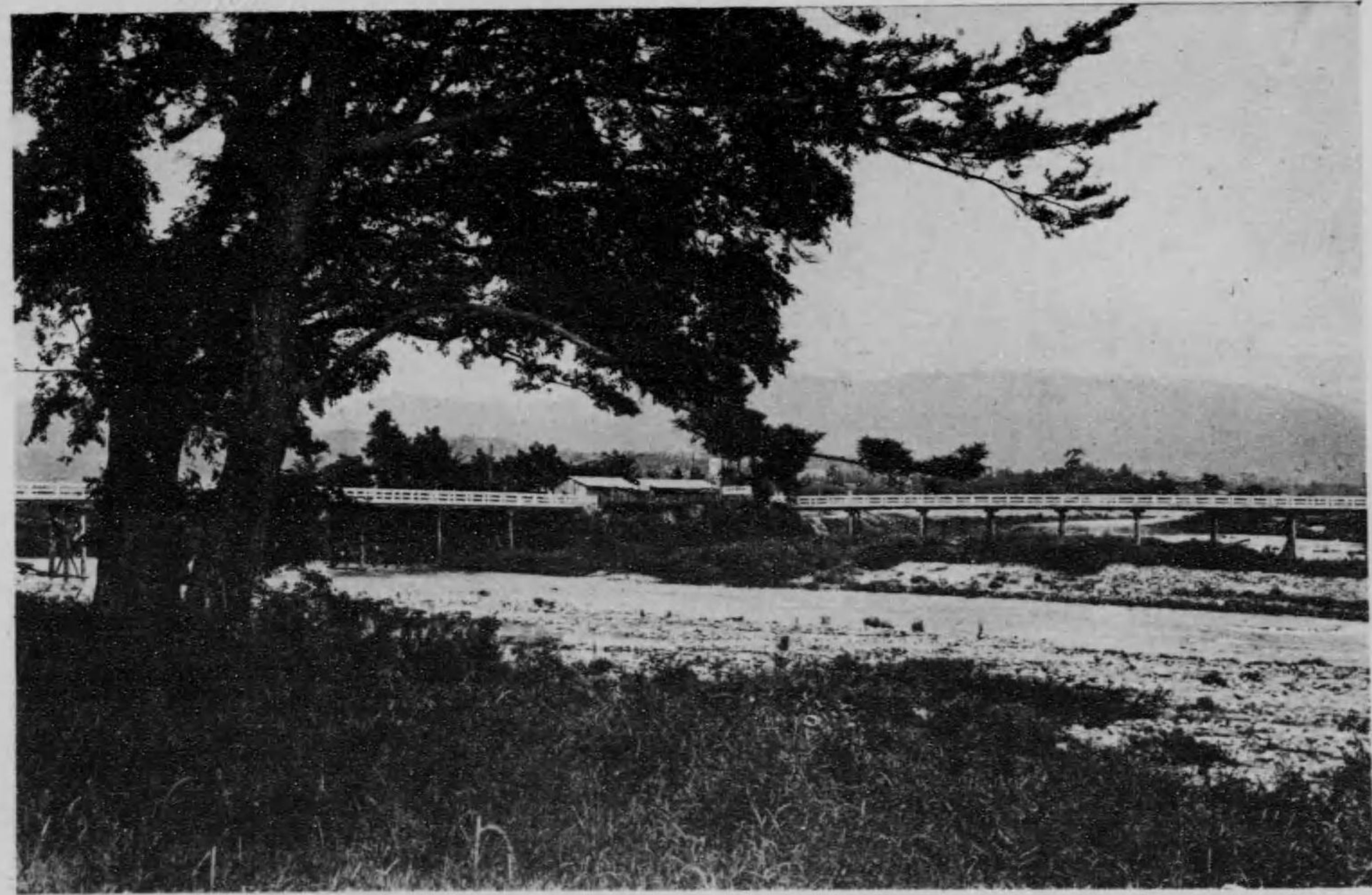
春夏の交、蹄跡咲き乱れて、一段の佳景を添ふ。



熊岩井堰



熊岩



橋田黒及橋町新

八、新町橋及黒田橋

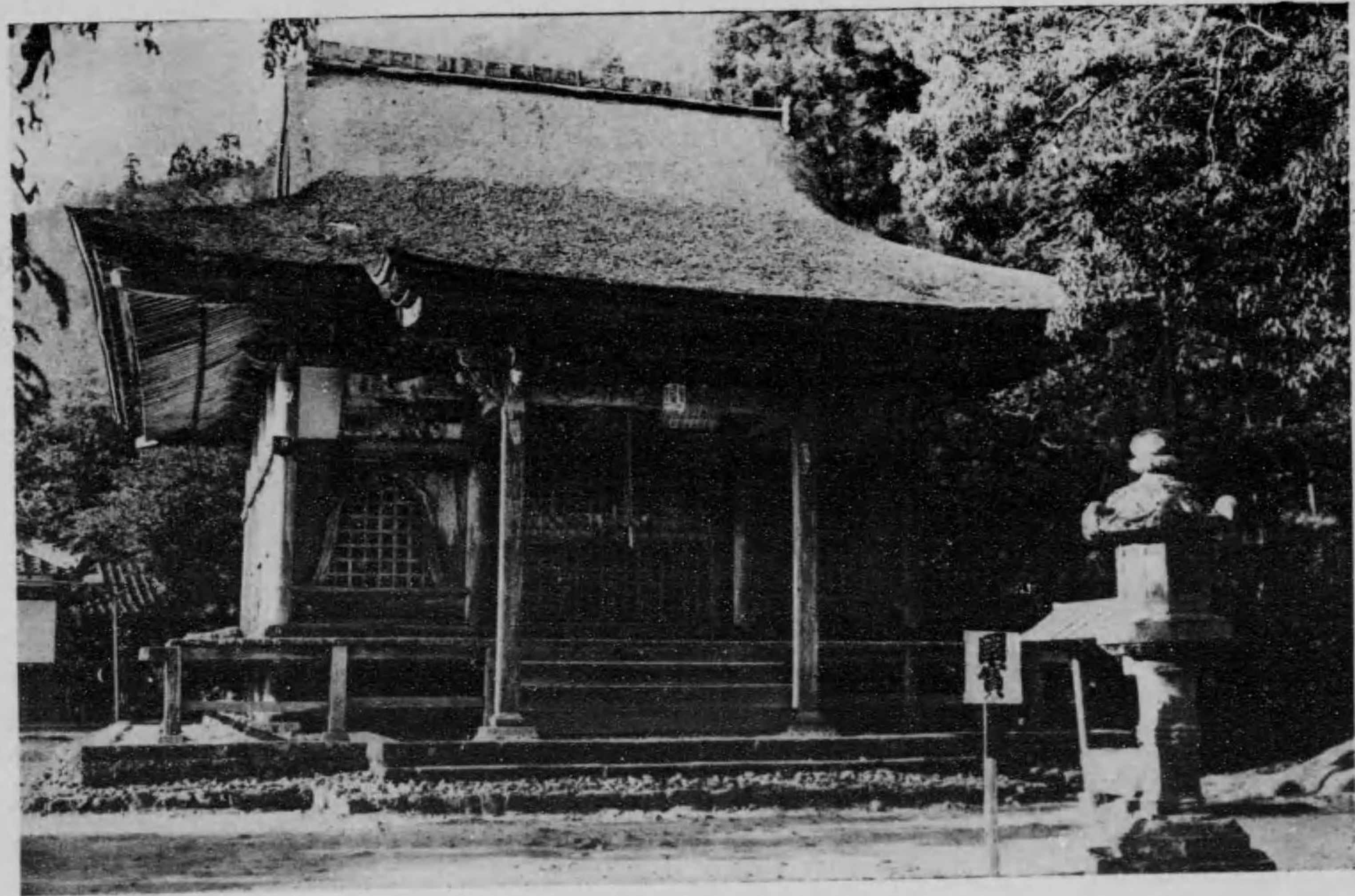
新町橋を渡り西南六拾町にして
赤目澁に達す。



高 橋

九、高 橋

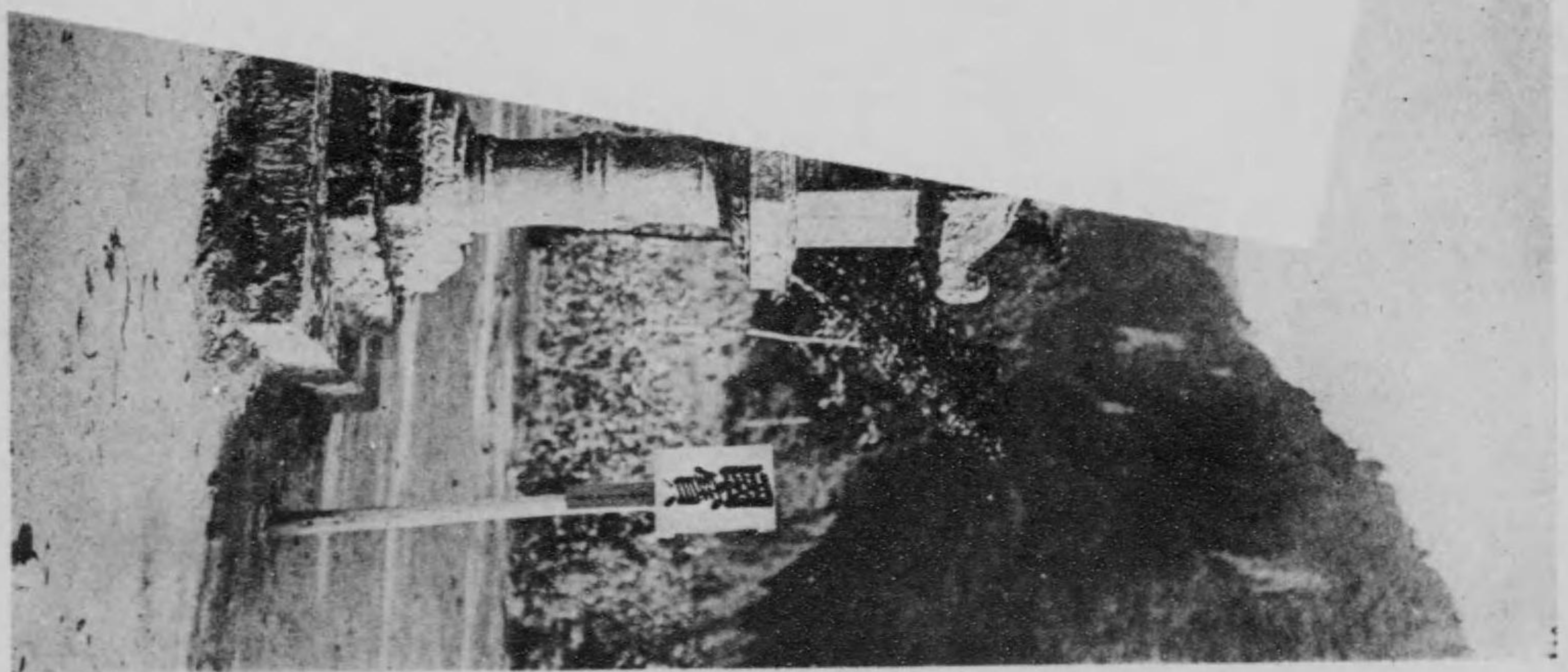
錦生村黒田川に架し、西より赤目四十八瀑に至る要路なり。



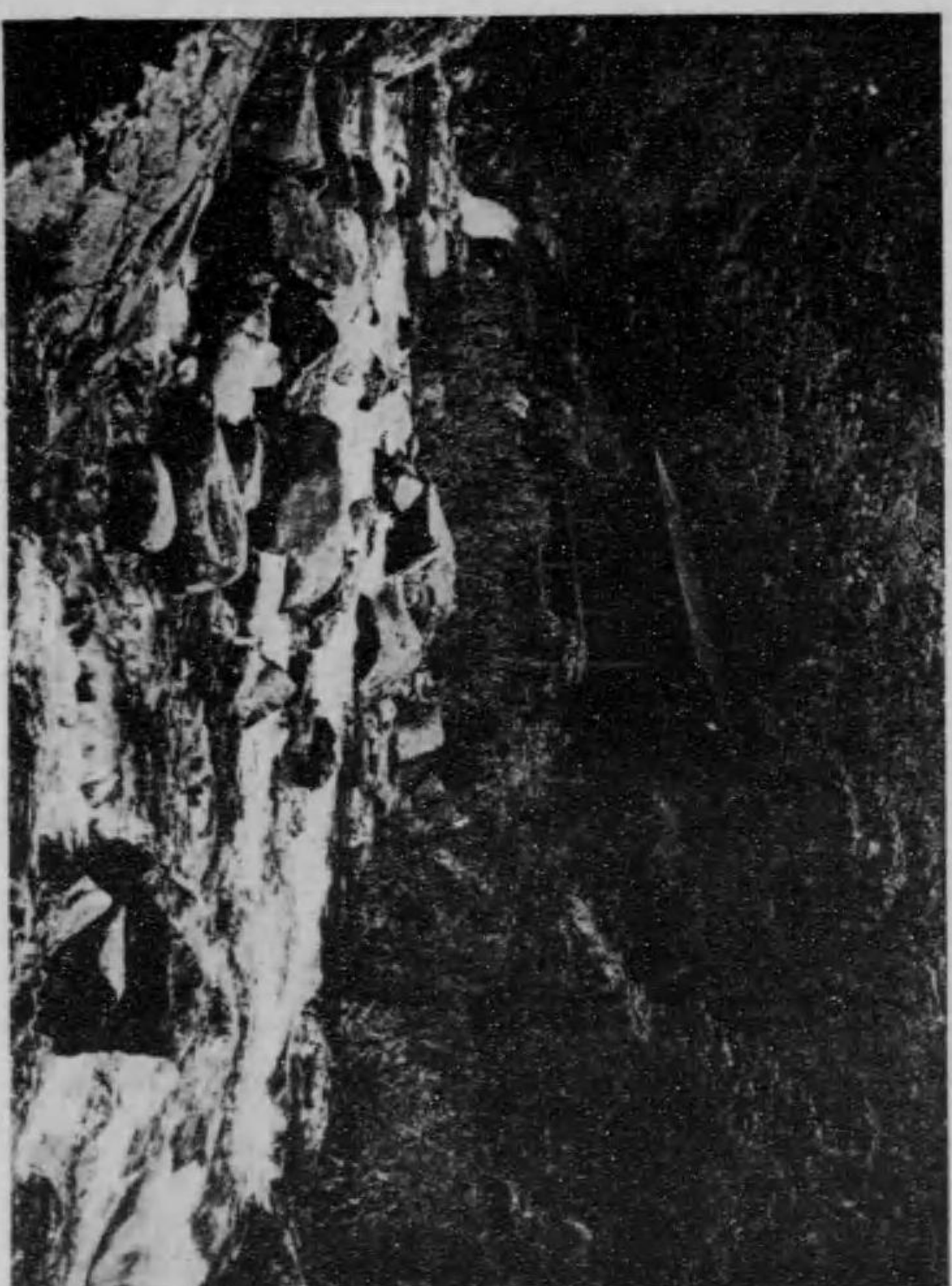
延壽院本堂

一〇、延壽院本堂
舊藩主藤堂侯の祈願所にして、
赤目不動を安置す。

一、春日造石燈籠
鎌倉時代奈良名工の作にして、
夙に國寶に編入せらる。



國寶石燈籠



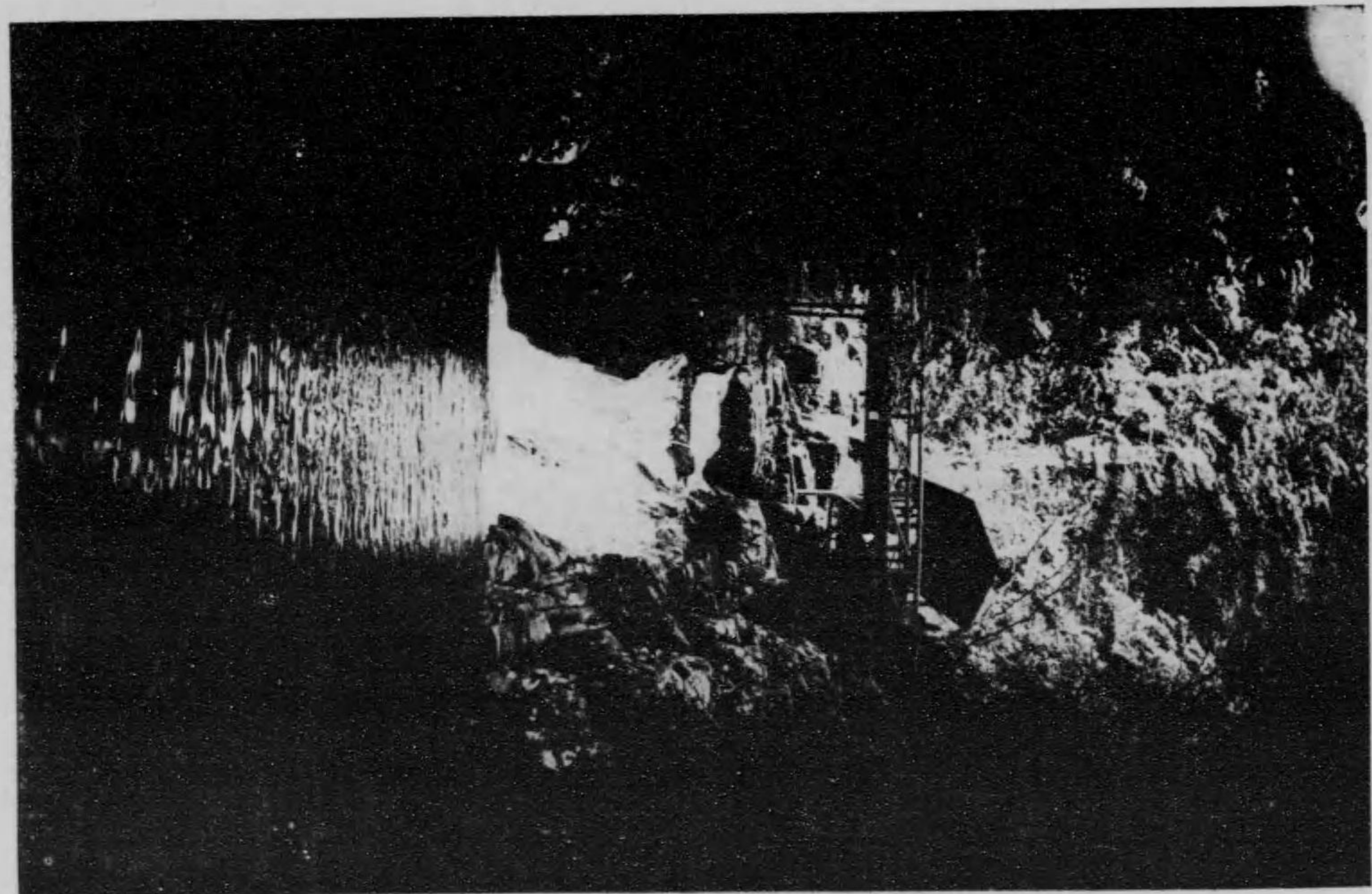
望遠の瀑蛇靈



橋石

一二、石橋
自然石にして渡渉に便なり。

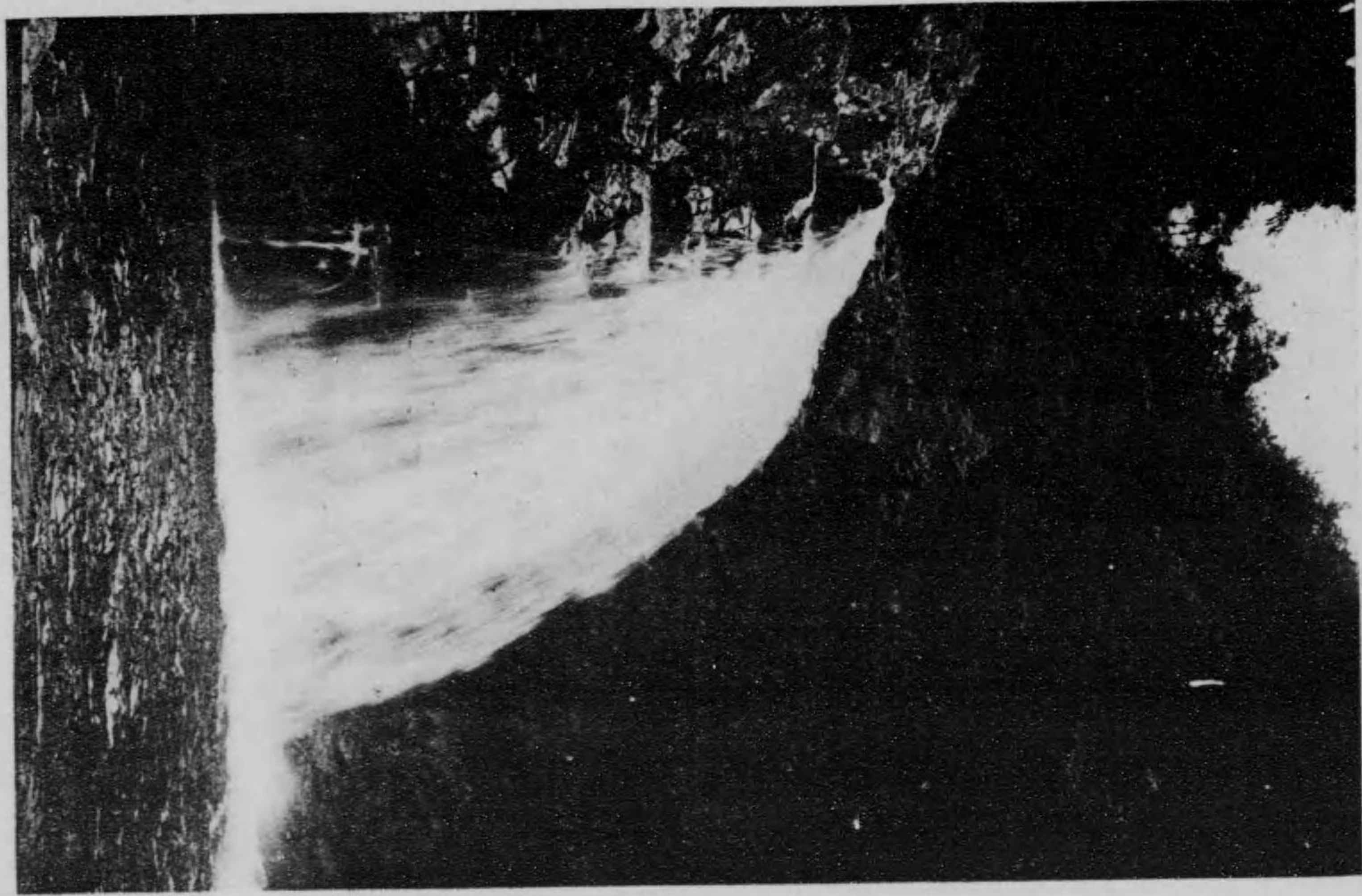
一三、靈蛇瀑の遠望
亂石を跋渉すれば、正面に靈蛇瀑あり。



瀑蛇靈内ノ瀑八十四目赤

一四、靈蛇瀑

上下二瀑に分れ、何れも靈蛇の
昇天するが如し。



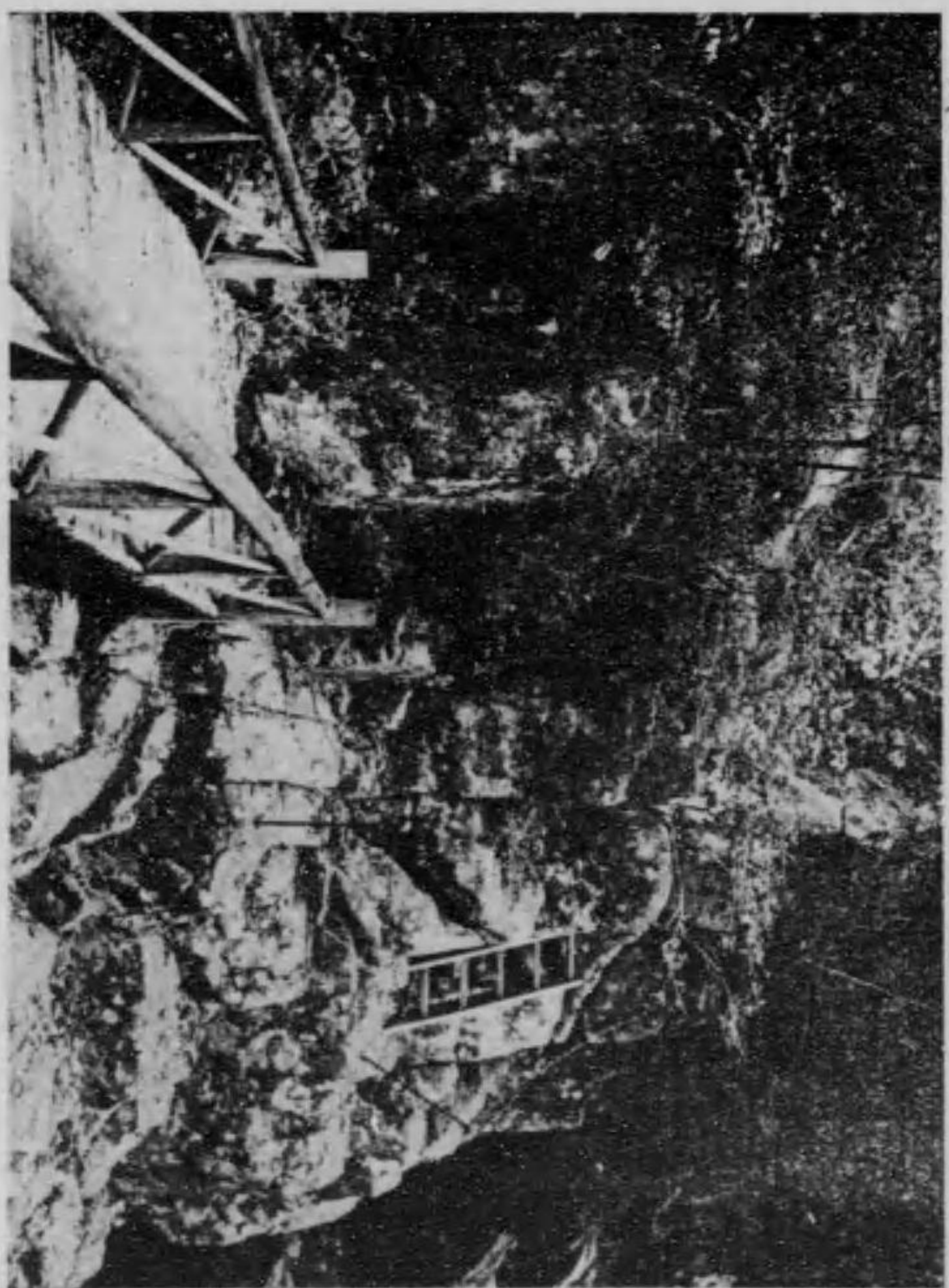
赤目八十八ノ内不動瀑

一五、不動瀑

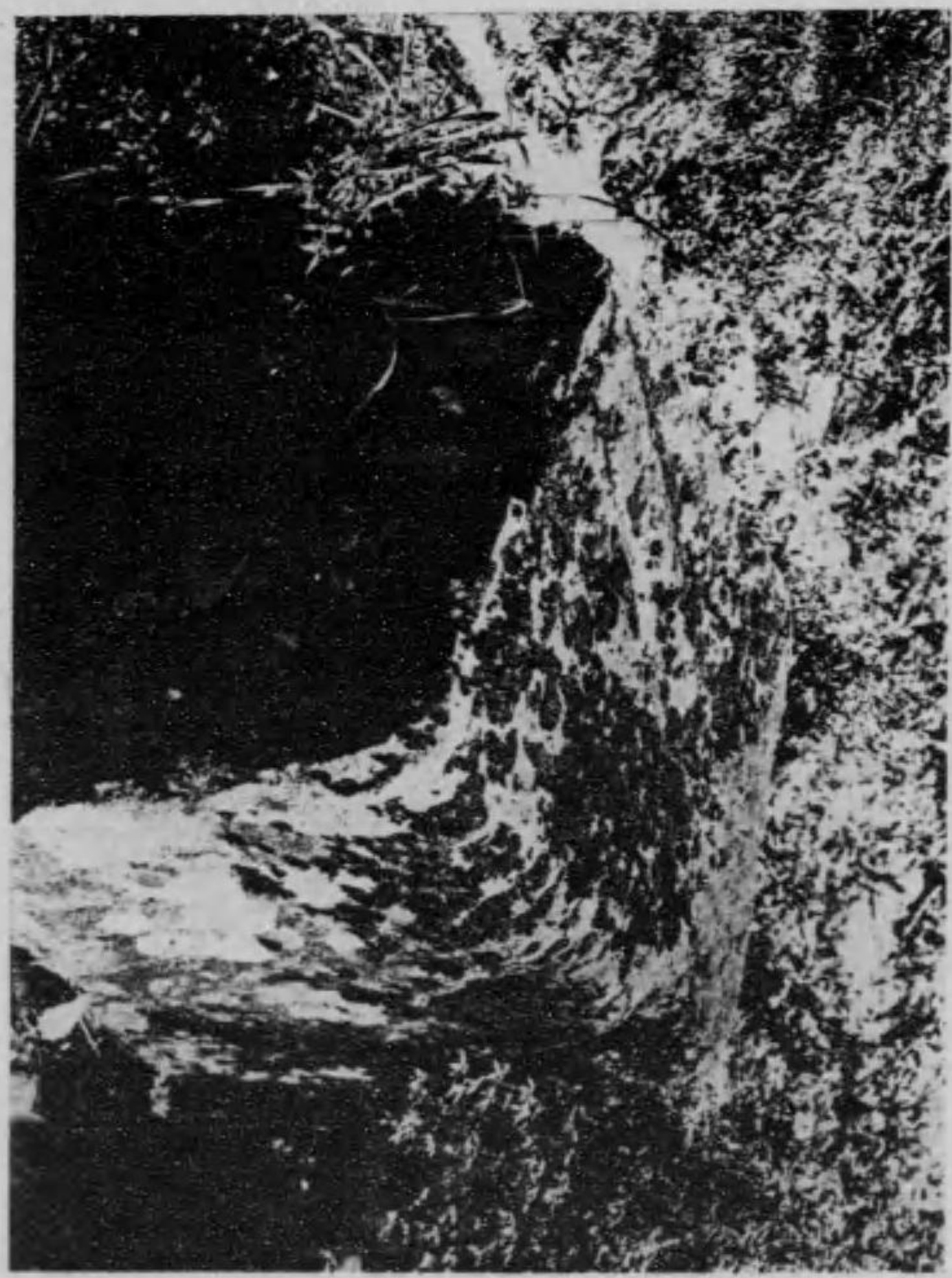
直下六十尺、潭淵又六十尺、潭周
百十尺を算し、水聲山谷に轟き、
水煙衣袂を濕し、全瀑中の壯觀
たり。

一六、不動瀑の附近
橋上より不動瀑を眺むるも亦絶景なり。

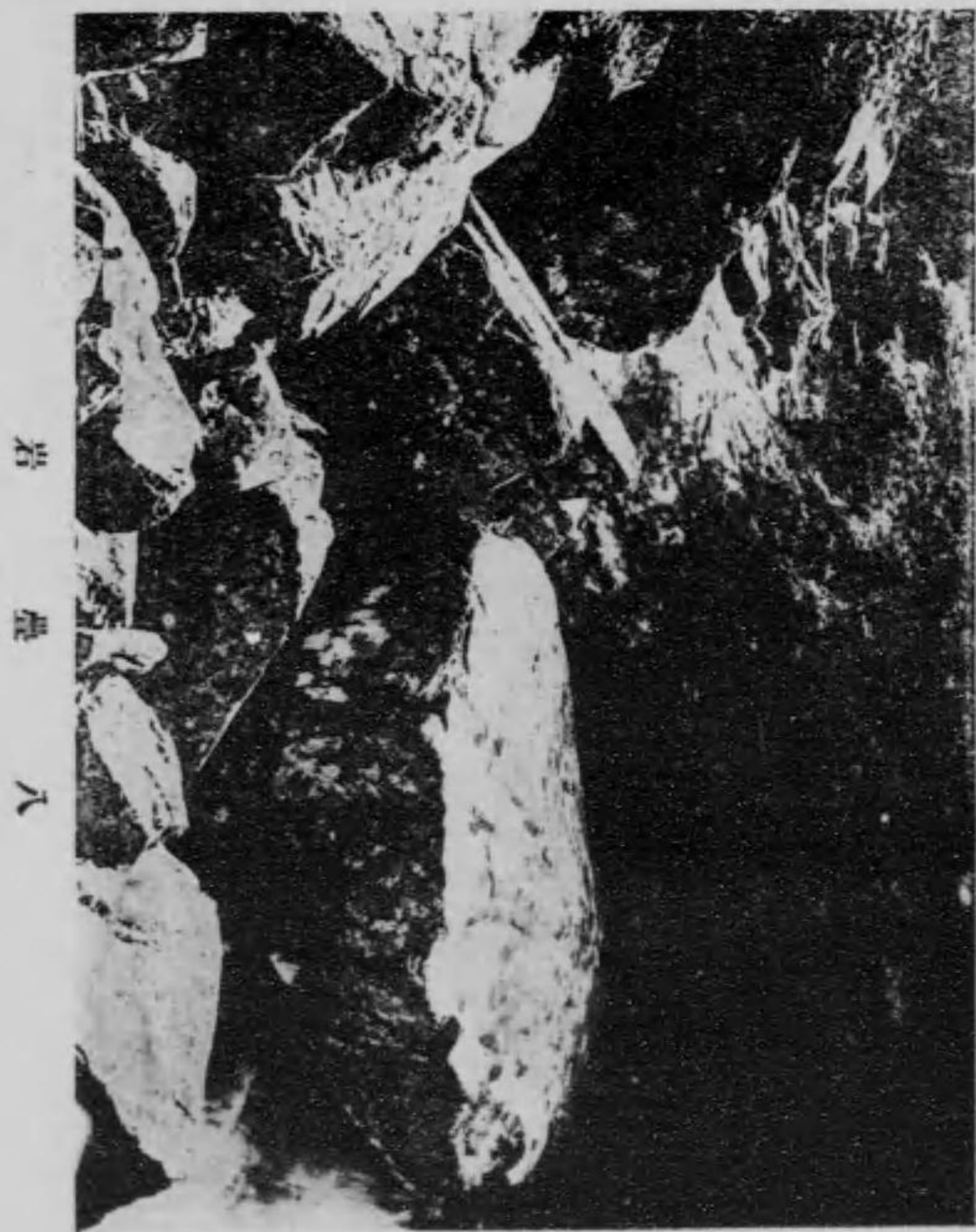
一七、藤堂侯御駕籠岩
自然石にして平方形をなし、駕籠を載するに
便なりしかば、往時貴賓の乗駕して觀瀑せる
ものは、概ねこの岩上に駕籠を駐め、大日の
飛瀑を觀賞せしといふ。



不動瀑の附近



藤堂侯御駕籠岩



岩 壘 八



望遠の瀑口大

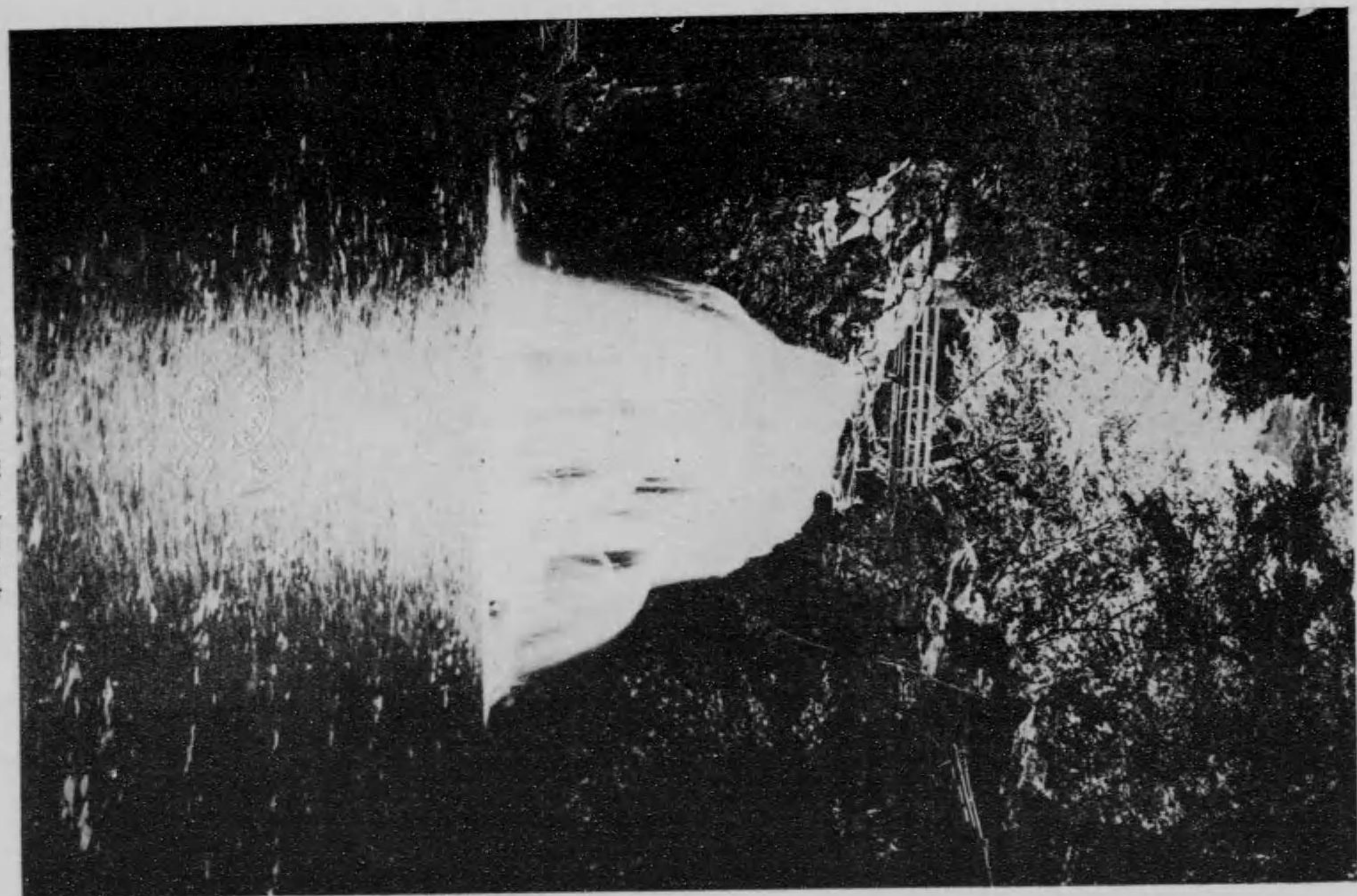
一八、大日瀑の遠望

赤目山の中腹にありて三層をなす、其の直下約五百尺にして、大雨増水の時は、里餘を隔つるところより、遙かに眺むるを得、紅葉を隔彩るる秋季には、全山中唯一の絶景を呈す。

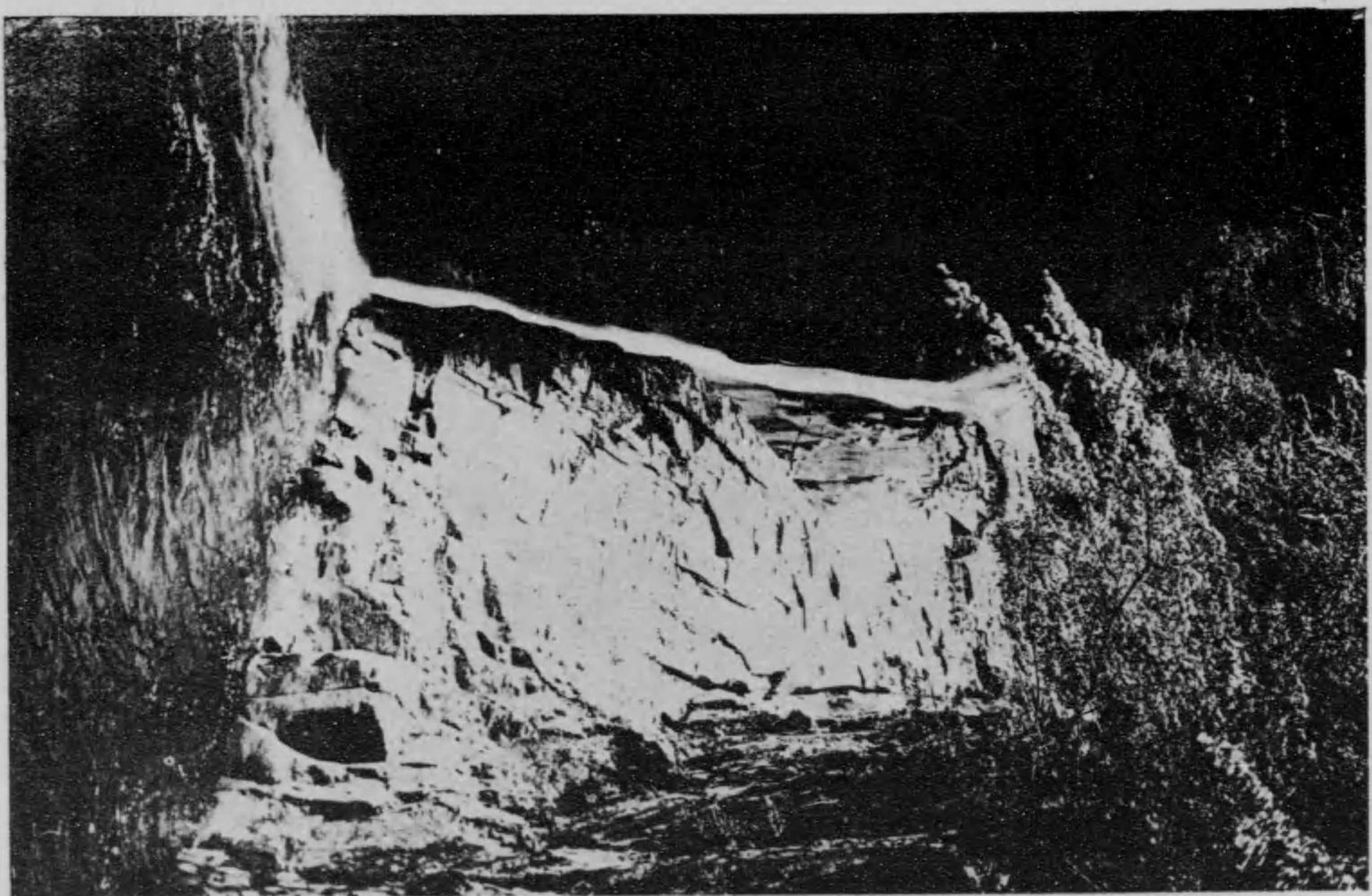
一九、八 壘 岩

周囲十三間にして、岩面平坦なり。

二〇、千手瀑
直下四十尺、潭淵百十尺、淵周三百三十尺を算し、瀑影水底に映じ雅致を呈す。



千手内ノ瀑八十四日赤



瀑布奥内ノ瀑八十四目赤

二、曳布瀑

直下百余尺真に白布を垂れた
るが如く全瀑中の壯觀たり。



斧 潭



龍 谷 壺

三、龍 壺

懸水岩間に落下して自然の潭淵をなし水底測るべからず。

三、斧 潭

潭水波紋をなし紺碧清澄を極む。

二四、夫、婦、瀑
懸瀑二をなすを以て此の名あり。

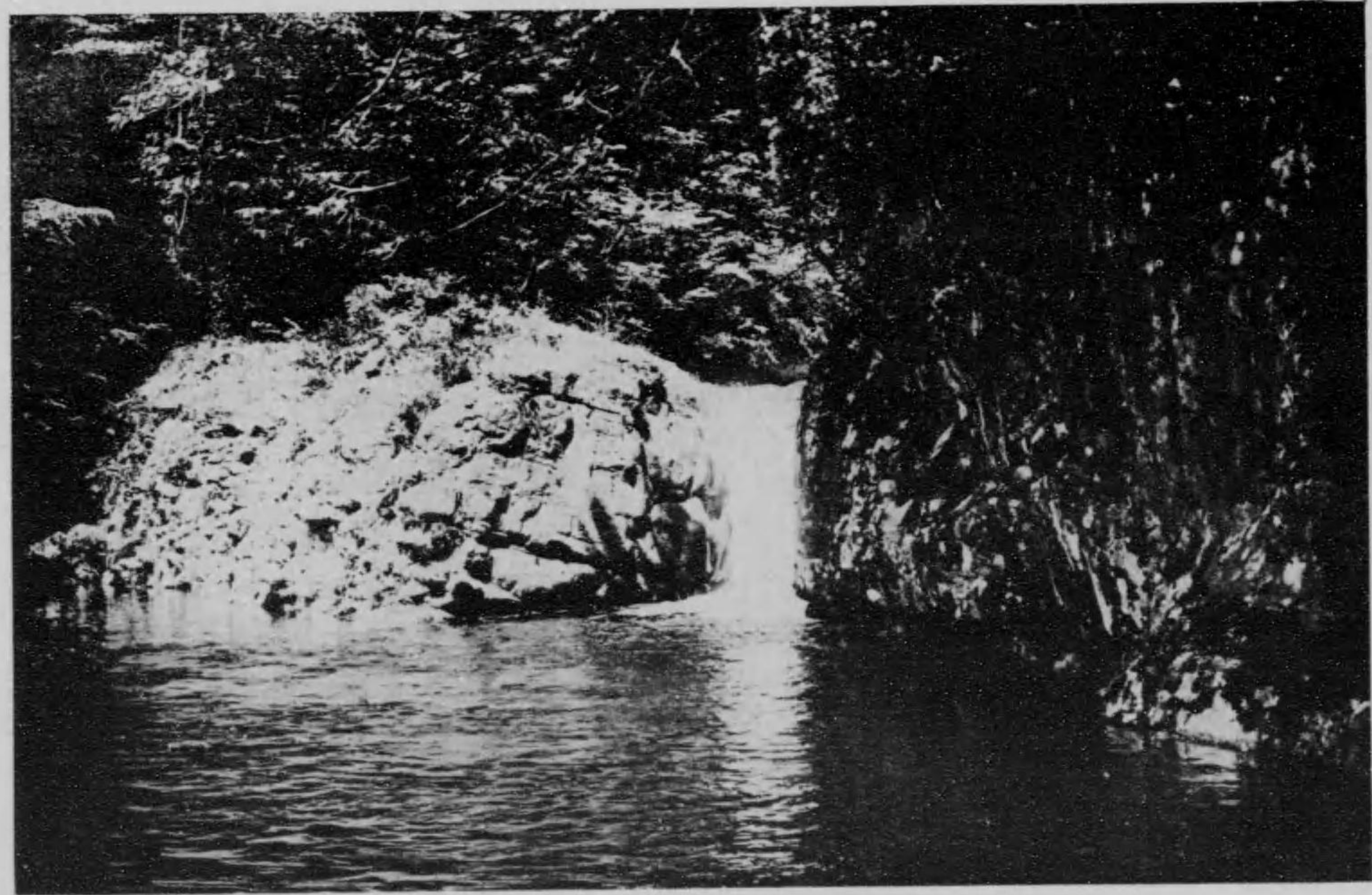
二五、毘沙門瀑
奇岩の突起毘沙門の如し故に名づく。



瀑 婦 夫



瀑 毘 沙 門



赤日八十四ノ内筭瀑

二六、筭瀑

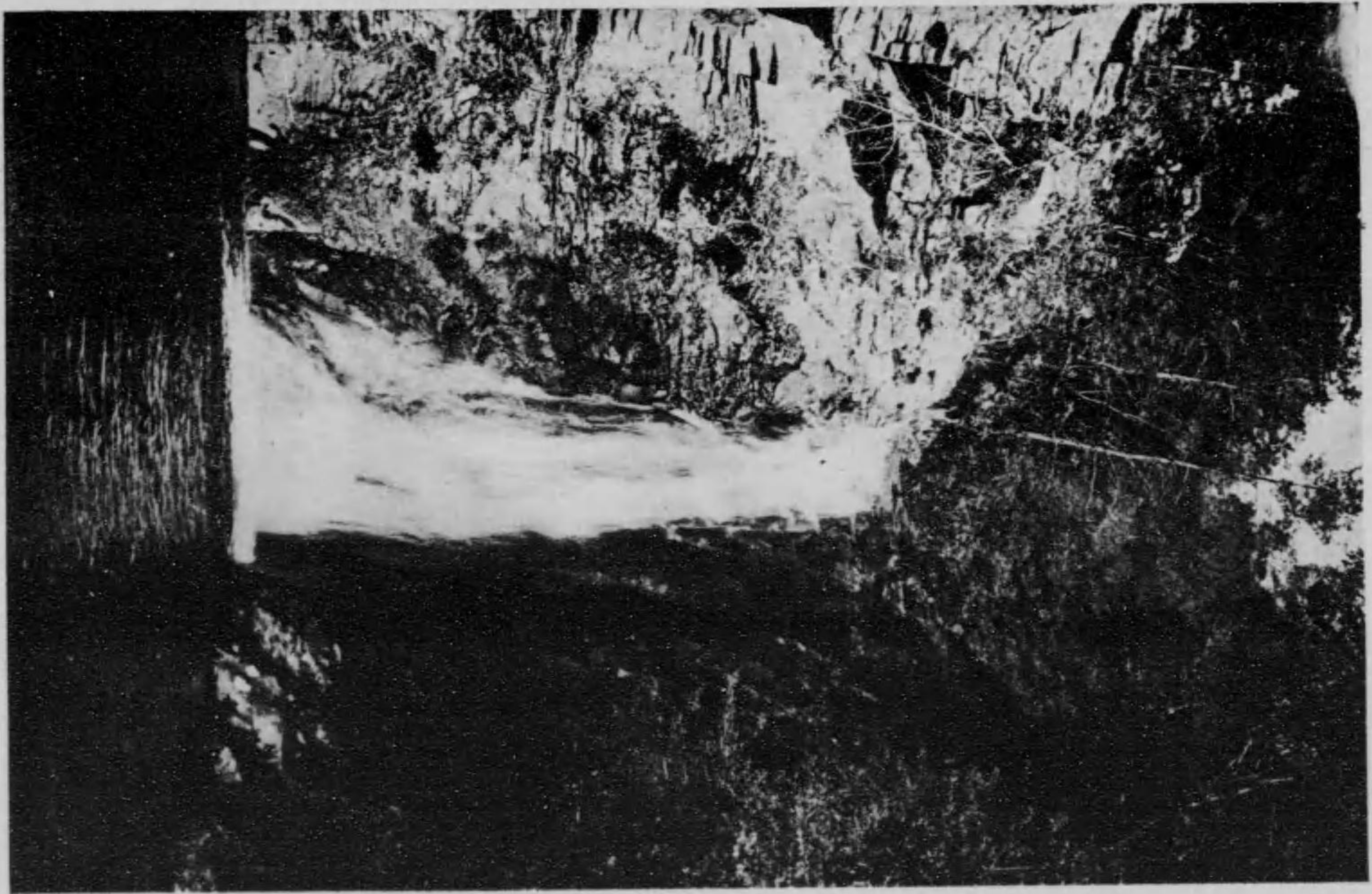
懸水筭に似たるを以て名づけ、
潭中にて釣魚するも亦一興な
り。



赤目八十四ノ内荷壇瀑

二七、荷壇瀑

岩石を以て二瀑を隔て、雄を競うて落下し、真に荷へるが如し。



瀑冠尾内ノ瀑八十四目赤

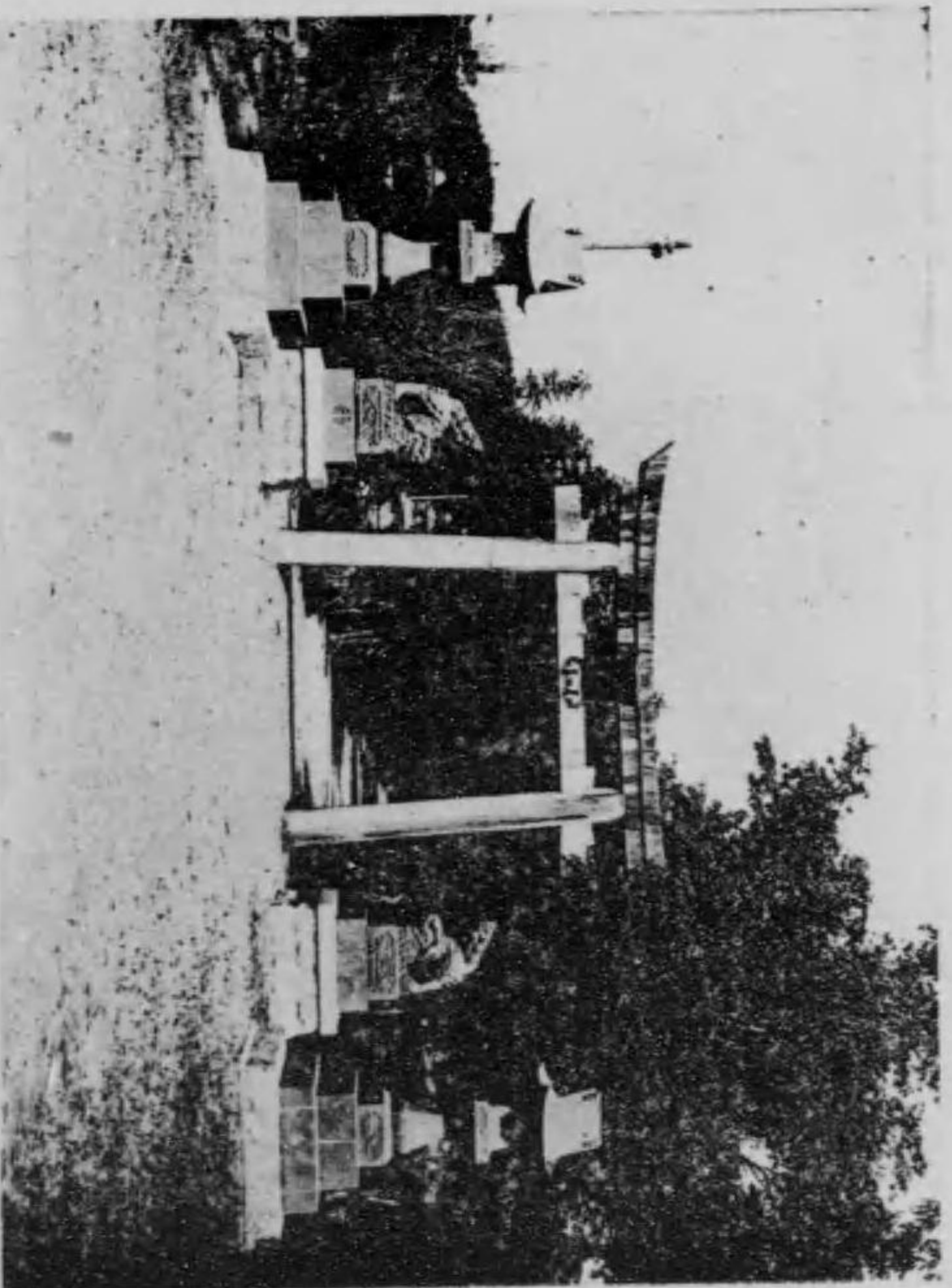
二八、琵琶瀑

直下五十尺、その形潭淵と共に
琵琶に似て、全瀑中の偉觀たり。

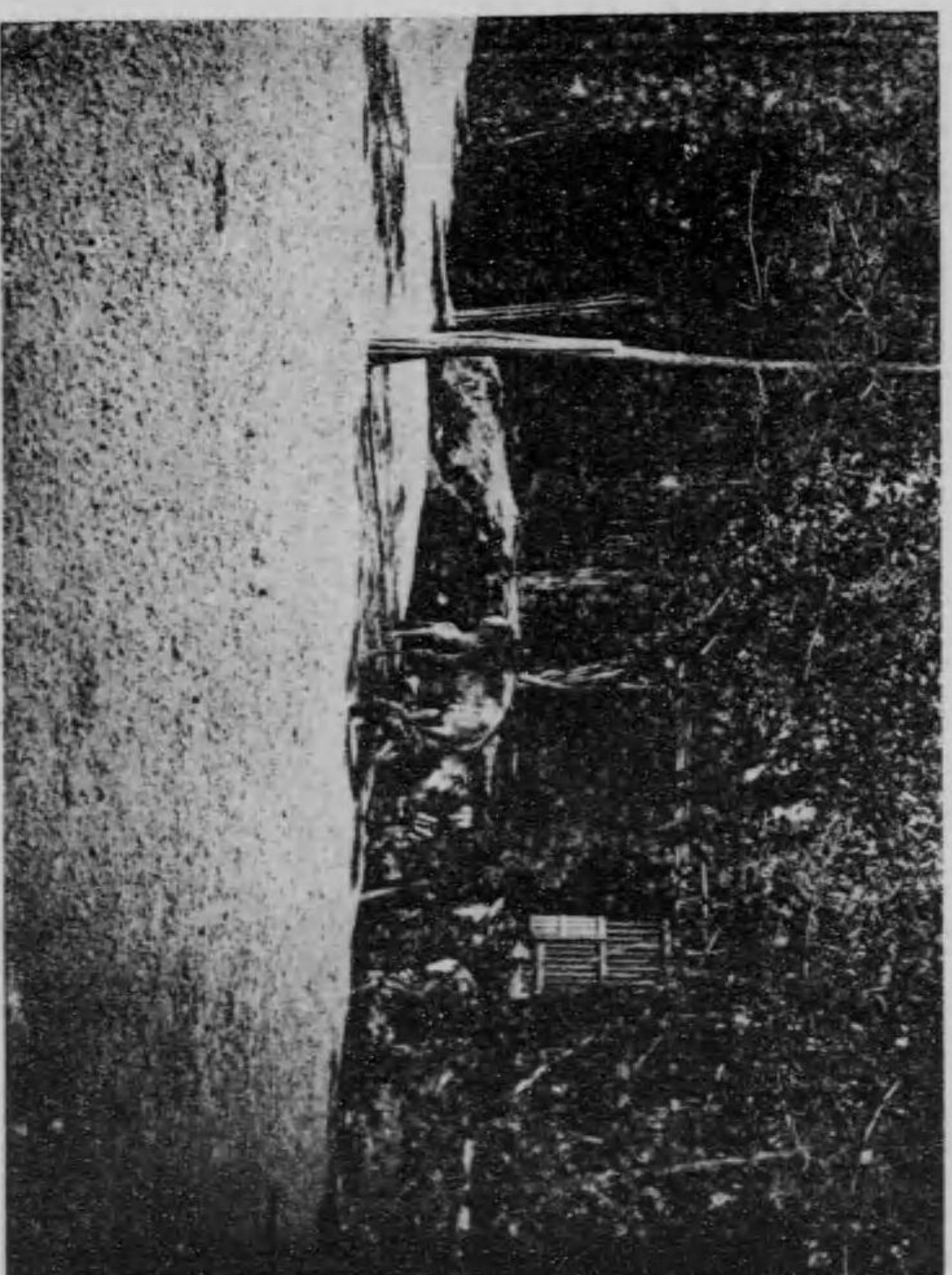
二九、積田神社

縣社にして箕曲村大字夏見にあり、奈良春日神社の奥宮と稱せらる。

三〇、積田神社の神鹿



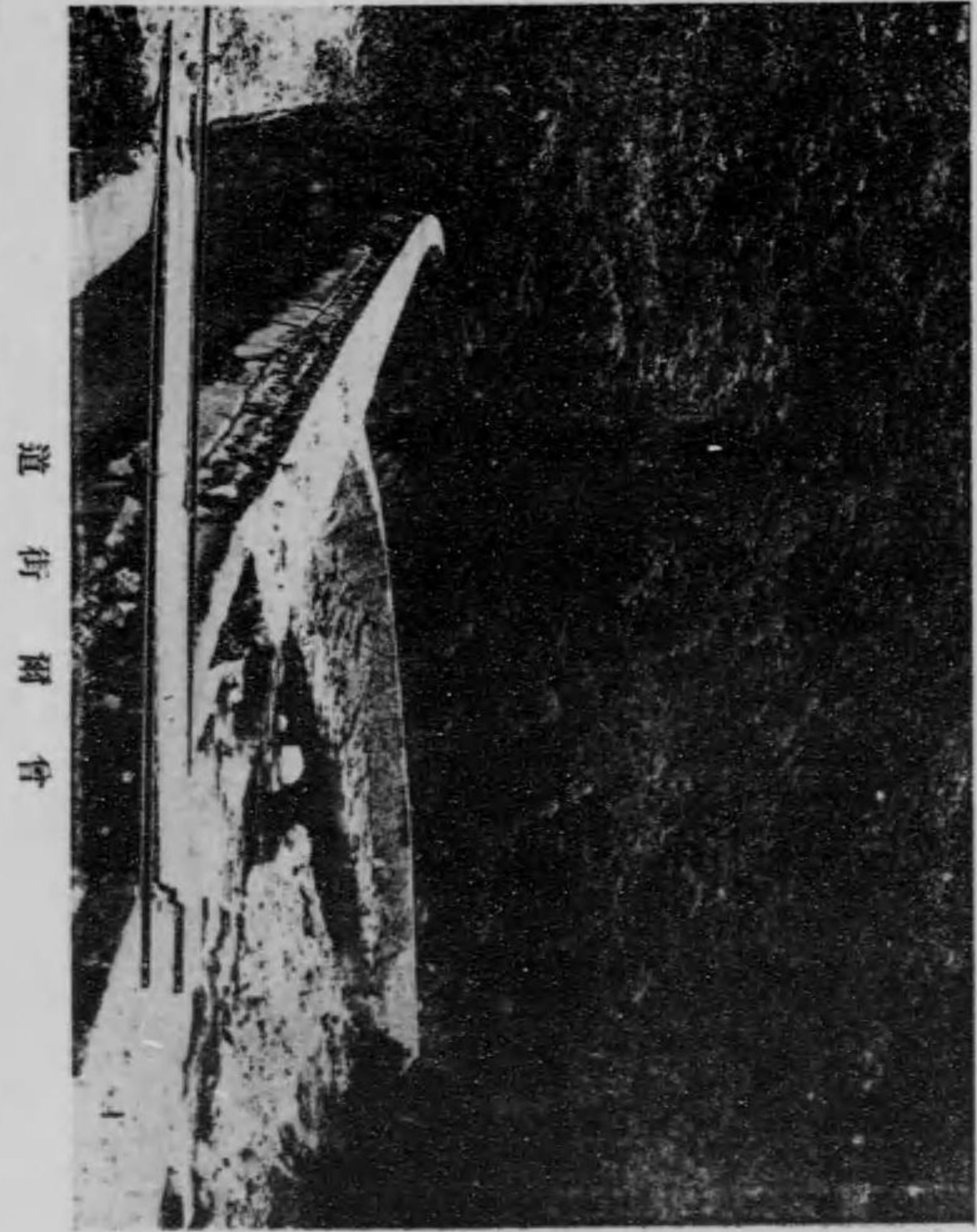
社 神 田 積



鹿 神 の 社 神 田 積



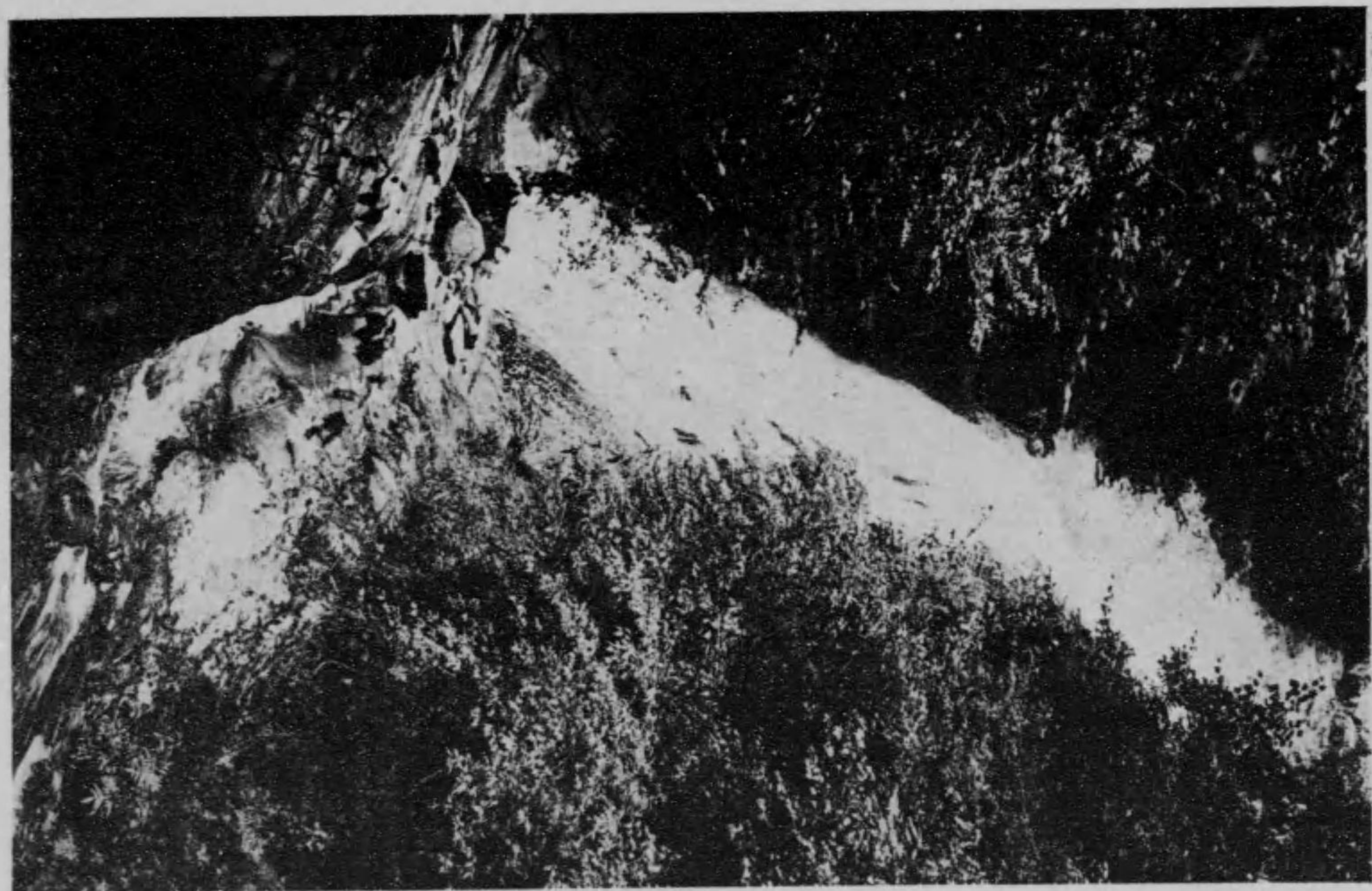
香 落 瀑 橋



會 爾 街 道

三一、會爾街道
名張町より大和國會爾に至る中間の絶景なり。

三二、香落瀑橋 (在香落)
不動瀑及行動瀑に至る奇橋なり。



瀑動行溪落香

三、行、動、瀑 (在香港)
直下百五十尺、瀑水岩頭より落
下し、綠樹の間に反響して、眞に
絶佳を極む。



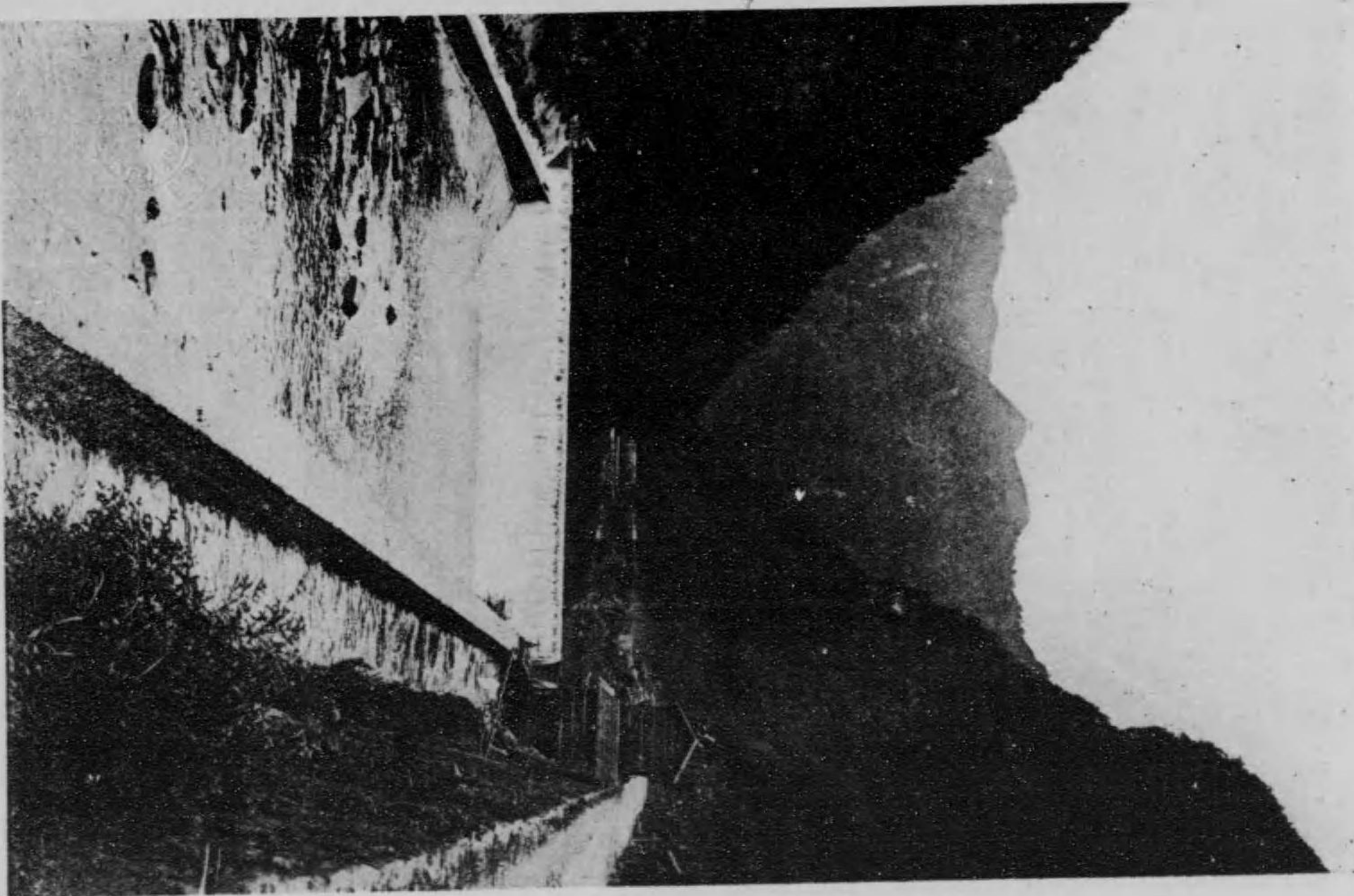
(二) 瀑動不落香



(一) 瀑動不落香

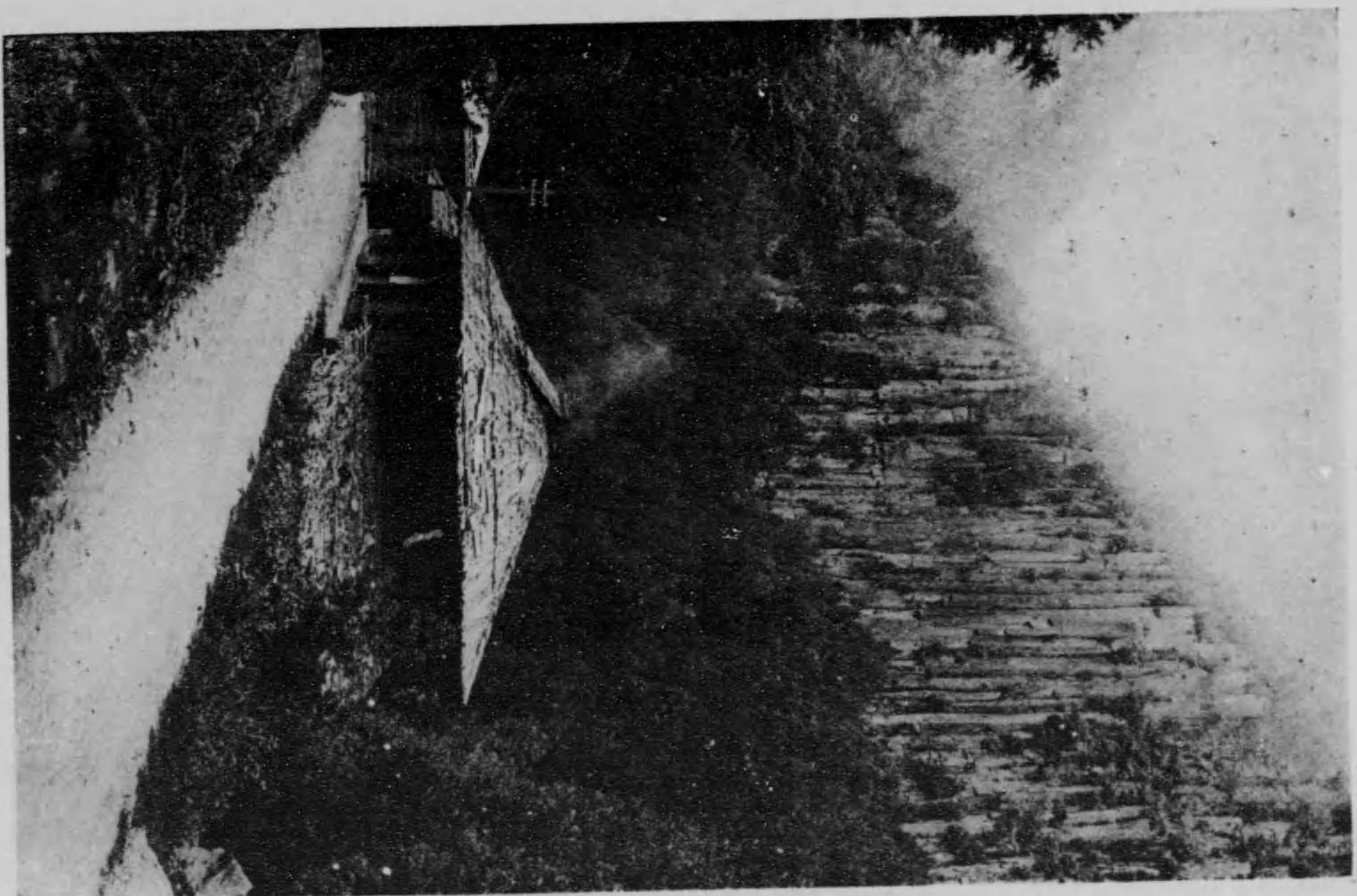
三四、香落不動瀑 (一)
直下二百尺餘にして壯觀をなす。

三五、香落不動瀑 (二)



香 菴 溪 堰 堤

三六、魁 堤
青蓮寺川にあり。



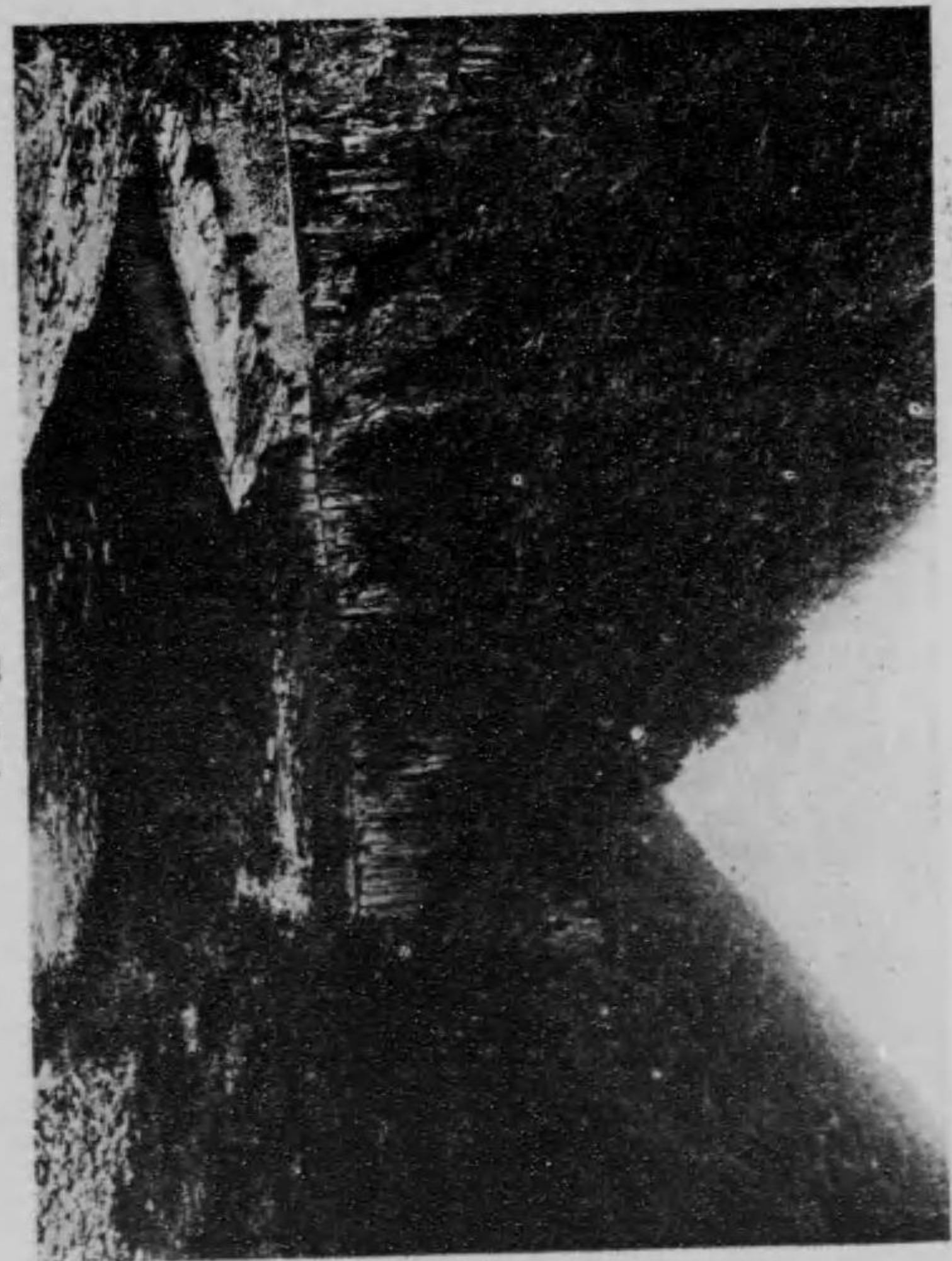
岩風屏溪落音

三七、屏風岩

奇岩峙立して重疊せる屏風の如し故に名づく。



小 丁 子



小 丁 子 の 崖

三九、小 丁 子
岩石直峙して真に天險をなす。

三八、小 丁 子 の 遠望
この附近は香落溪谷の中、奇岩怪石起伏し、山川幽邃を極め、伊山の耶馬溪と稱せらる。

四〇、八幡長者屋敷跡
廣妻町余富塚を極めし遺跡を憶ばしむ。

四一、經塚

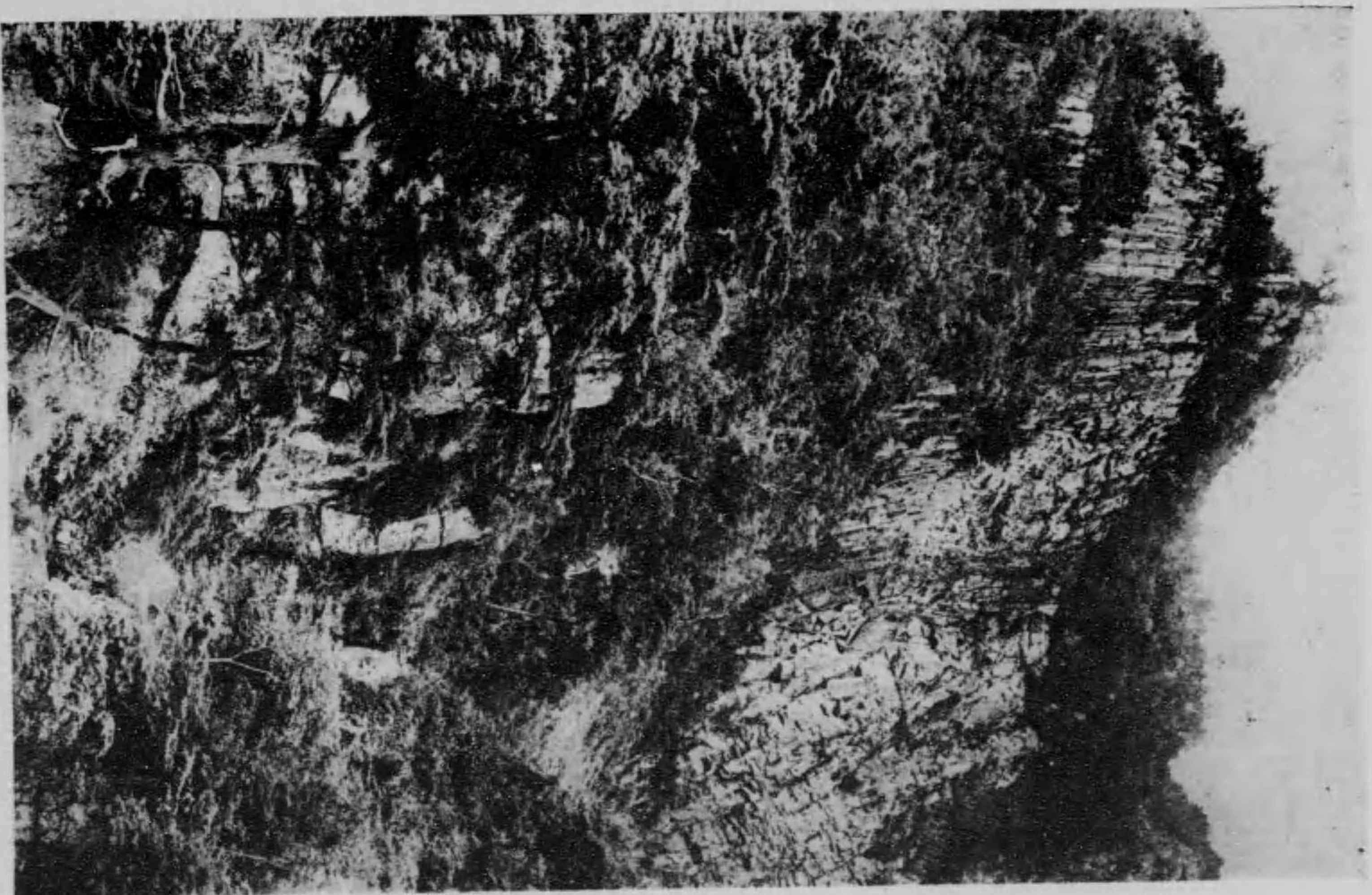
奇岩峙立して絶景をなす。



跡敷屋者長幡八



塚 經



し落即太小溪落香

四二、小太郎落し

往昔此地に八幡長者といへる
豪家あり故ありて其の一子を
この絶壁より突き落したりと
いふ。



林 森 の 落 香



流 上 青

四三、青蓮寺川の上流

奇石所々に點在して清流なり。

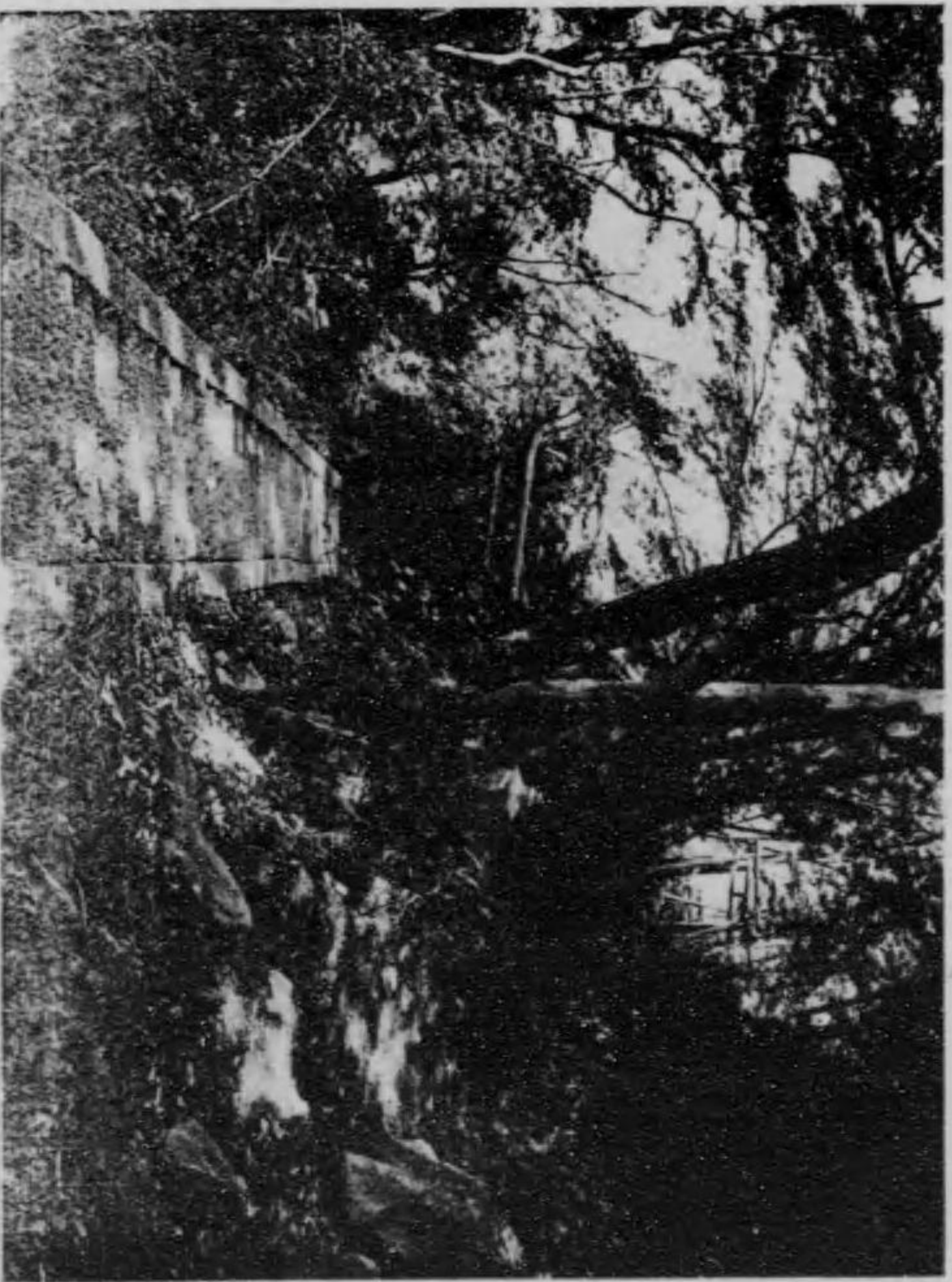
四四、香落の森林

杉檜其の他の雑林に適する良地なり。

四五、赤岩権現 (一)

比奈知村大字瀧之原の奥山にあり、本社は奇岩の中腹に祭祀す、諸國より崇敬するもの多し。

四六、赤岩権現 (二)



(一) 現權岩赤

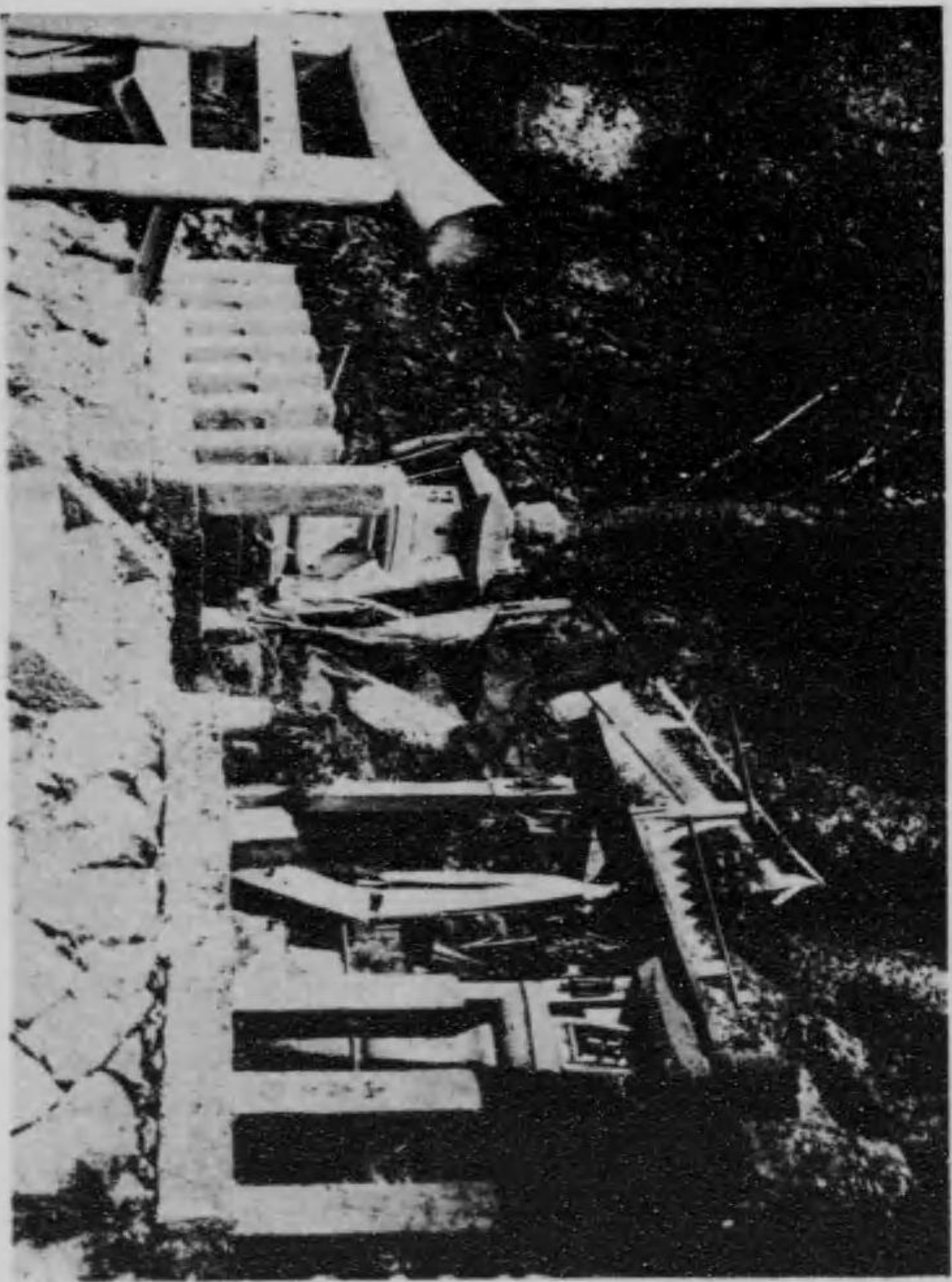


(二) 現權岩赤

四七、赤岩権現 (三)

四八、赤岩権現の風穴

此の風穴は絶へず通風し實に不可思議なりと云ふ。



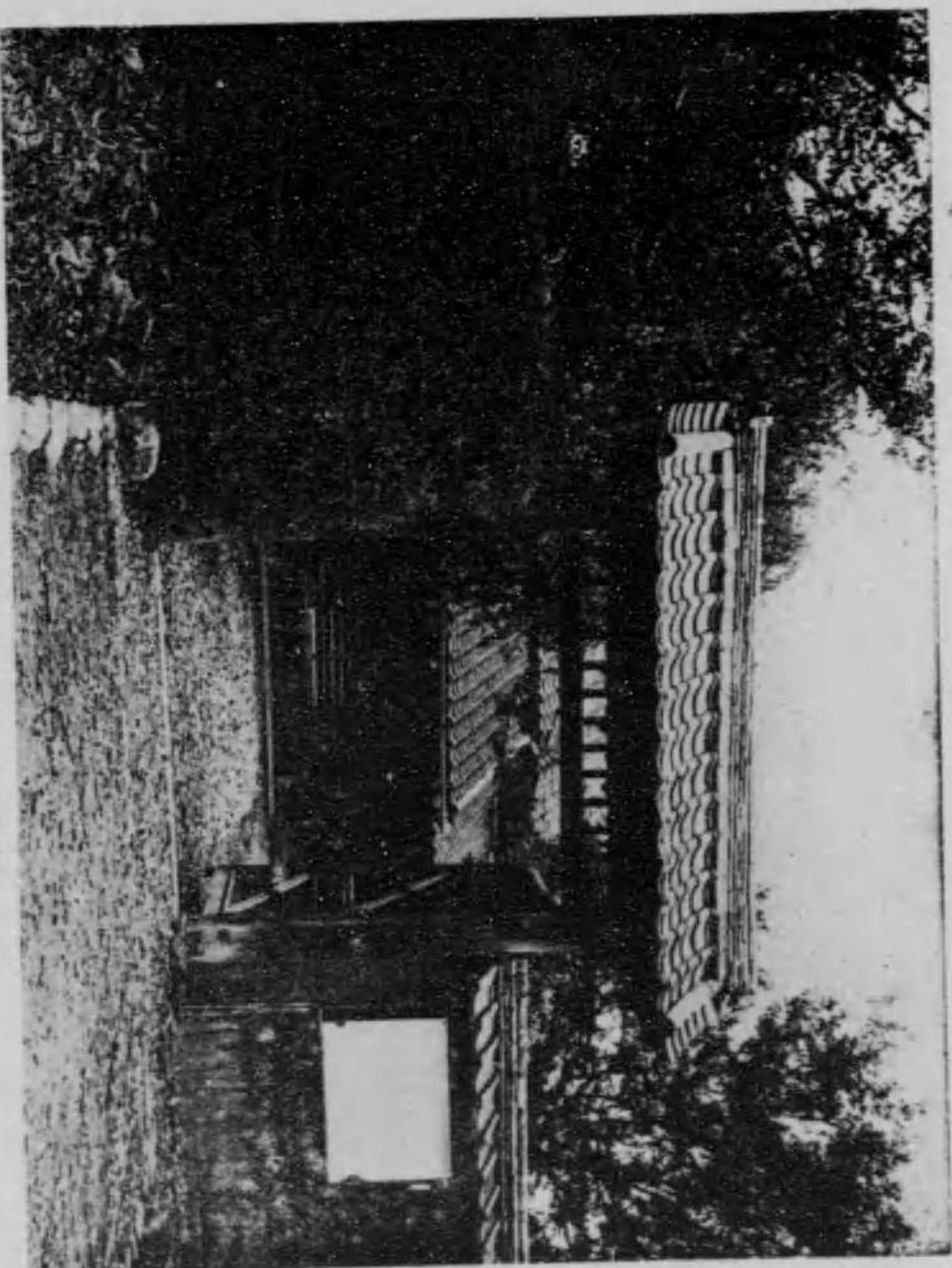
(三) 現権岩赤



(四) 穴風の現権岩赤

四九、舊藩主藤堂男爵の本邸（一）
名張町字峽間にあり。

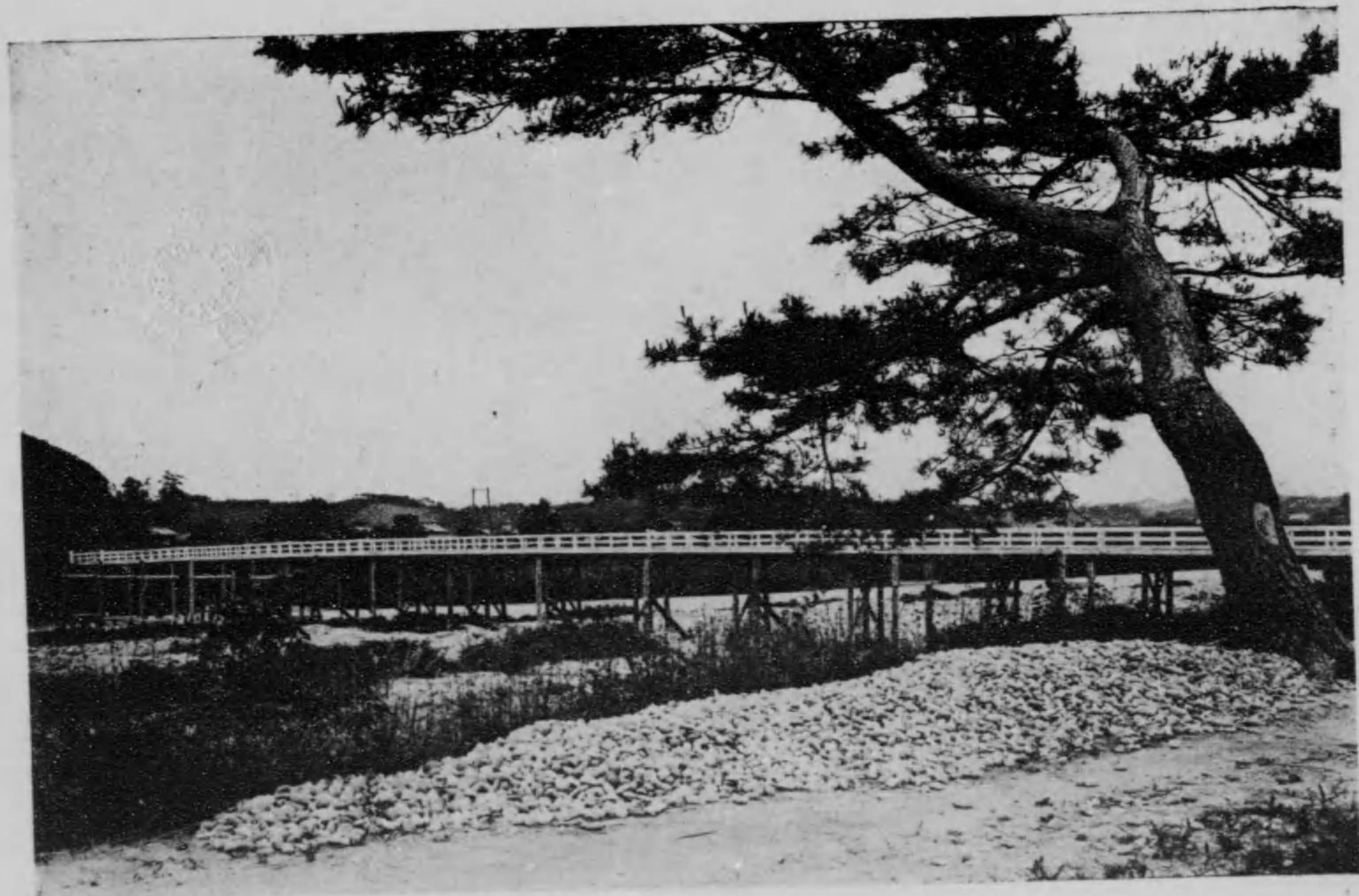
五〇、藤堂男爵邸の庭園（二）



邸本の爵男堂藤主藩舊



園庭の邸爵男堂藤



大 屋 戸 橋

五一、大屋戸橋の全景
名張八丁裏に架す。

不許複製

大正十二年九月十日印刷
大正十二年拾月十五日發行

定價金壹圓五拾錢

著者 芳澤謙二
三重縣名賀郡名張町字峽間九十一番地
 著作 成田秀麿
三重縣名賀郡名張町字峽間五十八番地
 著作 隅田勝治郎
三重縣名賀郡名張町字下横町三百五十三番地
 編輯 井上房次郎
三重縣名賀郡錦生村大字井手四番屋敷
 發行 成田秀麿
三重縣名賀郡名張町字峽間五十八番地
 印刷 森本源吉
三重縣名賀郡名張町字本町三百十四番地
 印刷 株式會社ナカ印刷所
三重縣名賀郡名張町字峽間六十六番地ノ四
 右代表者 小川七兵衛

發行所 三重縣名賀郡名張町字下横町三五三番地 隅田新聞鋪

電話一三九番
櫻井座六番四一八四六

終

